

## 立宗宣言の日に糺す—「教学要綱」の重大な不正・邪義17他

池田先生のご指導「文底が説かれて仏法は完結」を無視した邪義「教学要綱」を、破邪顕正する！

2026年4月28日 創価高校・大学4期 図斉修

(以下、赤青字、下線は図斉によります)



私は、4月2日、戸田先生のご命日に、拙文—<https://share.google/OR0xUKFb2rkg6NsPD>—を記し「教学要綱」が、日蓮大聖人の御本尊の相貌について—「寿量の仏」は釈尊(78頁)—とする邪義を記した大謗法の書であることを論証、断定しました。

そして、本日は立宗宣言の日でございます。その深義を池田先生のご指導により心肝に染めて、以下思います。「教学要綱」40頁の一日蓮大聖人は『法華経』の肝心である「南無妙法蓮華経」を根本の教え(宗)とする立場を清澄寺で宣言された(立宗宣言)—とはあまりにも酷い文であり、不正だ!と。

この「立場とする」の表現では、日蓮大聖人の本意を冒瀆している。これでは、まるで大聖人様が「南無妙法蓮華経」の外にいて、この度、「法華経」の立場を担い、「法華経」の肝心を宣言されたかのような主従逆転の誤解が生じてしまう。

「教学要綱」は、「南無妙法蓮華経」が法華経には明示されていないことを踏まえた記述をしなければならない!池田先生は、「法華経二十八品は、三大秘法の仏法の序分として流通分として用いるのである」(旧版『創価学会版妙法蓮華経並開結』序文)とご指導なのです。

池田先生は「観心本尊抄」講義(池田大作全集第24巻)で、以下ご指導です。—虚空蔵菩薩 大聖人は竜の口、佐渡の法難をもって、法華経に記されている外用の辺の予言をすべて身読み終わり、御自身、久遠御本仏としての内証を確証されるや、初めて御本尊を顕されたのであります。大聖人の御内証においては、久遠の仏としての御境地は、すでに赫々としてあられたと、拝察します。

恩師戸田城聖先生は「清澄寺大衆中」の御文を講義された際、大聖人は、虚空蔵菩薩に、日本第一の智者となし給えと祈願された清澄寺在住の時、すでに御本仏と覺られたと拝せると言われておりました。事実、もし、末法御本仏としての御境界を得ておられなかったならば、三十二歳の立宗宣言もなかったはずであります。時すでに釈尊の白法は隠没した末法であることは明々であり、したがって釈尊の仏法をもって立てられる道理がありません。釈尊の仏法ではない新たなる仏法を立てられたことは、御自身が末法救済の御本仏であるとの御確信があったればこそであります。 1/61

しかも、大聖人は二十余年間、釈尊の法華経を身をもって読みきられ、大聖人の出現によって釈尊の法華経は虚妄でなくなったといえるまで実践しぬいて、いよいよ、御自身が御本仏としてのお振る舞いに移られたわけであります。竜の口、佐渡の時期は、まさにこの発迹頭本の時でありました。一と。

(私見) 上記赤字論述より、日蓮大聖人の立宗宣言を、「教学要綱」が一「南無妙法蓮華経」を根本の教え(宗)とする立場を清澄寺で宣言された一と記すのは、池田先生のご指導に違背した酷い記述であり全くの不正なのです。なぜなら、立宗宣言は自解仏乗の結論だからです。以下、池田先生のご指導です。一大聖人は、それまでの「是聖房蓮長」という名を捨てられ、自ら「日蓮」と名乗られている。日蓮とは「日月」と「蓮華」です。この御名乗りは「自解仏乗」であると仰せです。日月のように衆生の闇を照らし、蓮華のように清らかに妙法の花を社会に咲かせていく使命を自ら悟られたからです。(中略) 南無妙法蓮華経は末法の衆生が仏性を涌现する根源の道です。その道を立てたという意味では「南無妙法蓮華経」宗を立てられたともいえます(「御書の世界」(上)(池田大作全集第32巻)一と。

これが、立宗宣言の本義なのです！そして、立宗宣言後の御書がすべて「日蓮」としたためられているのです。寂日房御書(全903、新版1269頁)には「日蓮となること自解仏乗なりと云いつべし」とあるのです。大聖人様は決して「法華経」の立場になって立宗宣言されたのではない！さらに、以下、拝しました。

北陸広布20年記念総会 明星 1974.4.28(「池田大作講演集」第7巻)

本尊の具体的内容 大聖人立宗のことにつきましては、大石寺二十六世日寛上人は「立正安国論文段」において、こう述べておられます。「凡そ後の五百歳中広宣流布の時既に来る……十二歳に入室し、十六歳に落髪す。学は八宗に亙り、歳は三般に入る。建長五癸丑四月二十八日朝陽、眉を旋げて始めて経題を唱う。一宗の濫觴この一涓に在り」(聖教文庫59)12頁)云云。この御文によってもわかりますように、日蓮大聖人はじつに二十年間の長きにわたる、水ももらさぬ周到なるご研鑽を経て、しかる後に、断固として一人お立ちになったのであります。いまは、それより七百余年を経て、その大慈大悲のおかげを一身にこうむって、現在の私どもがあるわけであります。私は不肖ながら、皆さん方の代表として、今朝はあらためて日蓮大聖人に対し奉り、深く深く感謝申し上げてまいりました。(中略)

立宗の日にならみまして考えますことは、日蓮大聖人は、いったい何をこの世に弘めようとしたのか、という点であります。それは、端的に申し上げれば「本尊」であります。根本として尊敬すべきものとしての「本尊」であります。人は根元に迷えば、枝葉にも迷い、根元に迷いがなければ、枝葉末節の迷いもおのずから消えていくものである。ゆえに、いちばん大事な根元のところのものを、一切衆生に与え、弘められたのであります。では、その「本尊」の内容とは何か。それに関しては、御書のなかにおいて「自分は幼少の時に、清澄寺で虚空蔵菩薩に対して、日本第一の智者になしたまえと祈って、大智慧をたまわった」という意味のことを述べておられますが、晩年において、その具体的内容を第二祖日興上人に示しておられます。 2/61

すなわち「御本尊七箇の相承」のなかに「明星直見」の本尊の事如何。師の曰はく、末代の凡夫、幼稚の爲めに何物を以て本尊とす可きと虚空蔵に御祈請ありし時、古僧示して言はく、汝等が身を以て本尊と為す可し、明星の池を見給へとの玉へば、即ち彼の池を見るに不思議なり。日蓮が影、今の**大曼荼羅なり**」というのが、それであります。これにつきて、あえて誤解をおそれずに申し上げれば、「汝等が身を以て本尊と為す可し」とあるとおり、人間の生命をもって本尊とせよ、とのことでありまして、一切の根元は“生命”それ自体である。根本として大切に尊敬を払っていくべきものは、まさに“人間革命”そのものである、という哲理であり、思想なのであります。では、そう断言できる道理の根拠は何か。それは同じく同抄のなかに、このように申されております。「師の曰はく、**法界の五大は一身の五大なり……法界即日蓮、日蓮即法界なり。当位即妙不改無作本仏の即身成仏の当躰蓮花、因果同時の妙法蓮華經の色心直達の觀、心法妙の振舞なり**」云々と。すなわち、日蓮大聖人が仰せられるのには、**宇宙法界の全要素と日蓮という一個の生命体の全要素とは、まったく同じものである。**

日蓮の振る舞いというものは、人工的な作為を超えたところの、自然の奥深い因果にもとづいた「心法妙」の振る舞いなのであり、それゆえにこの生命を「本尊」として大切にできるのである、という意味のことを述べておられるのであります。私どもは、このご教示において「生命の尊厳」の原点を見いだし、あらためて“人間とは何か”ということ問い直し、この二十世紀において、新しき人間の復権をめざして、庶民と地域に根ざした斬新なる文化諸活動を展開しているわけでありまして。(中略)以上のように申し上げますと、一つの疑問がでてくるかもしれません。それは「原理上は確かにそうであろうが、現実問題としてみるならば、同じく“一個の生命体”といっても、日蓮大聖人は悟っておられる。我々は毎日迷っている。したがって、両者のあいだには、埋め尽くせない、越えがたい断層が存在しているのではないか」ということであります。だが、この疑問に対しては、**日寛上人**が「**寿量品談義**」のなかにおいて、まことに鮮やかに解答を与えられているのであります。

すなわち「**仏果を成ずくことは因行による、因行を励むことは信心による、信心を進むことは法を聞くによるなり。聞かずんば信心生ぜず、信心生ぜずば修行を怠る。修行を怠れば未来何なる処に生るべしや。仍よって歩を運んで聴聞肝要なり。聞く裏に信心を生ず、其の間が仏なり。一念信心を生ずれば一念の仏、二念信心生ずれば二念の即仏乃至一時信心を生ずれば一時の仏なり、一日信を生ずれば一日の仏なり乃至云云。信心生ずること必ず聞くに由るなり。縦ひ信心を生ぜざる族やからありとも、聞きさへすれば功德無量なり**」と。さきほどの疑問は、この日寛上人のお話によってお考えいただければ、道理のうえからおわかりいただけると思います。つまり、大聖人と私ども凡夫という両者のあいだには、法を聞くこと、信心という橋をかけることによって、立派に往来できると、**日寛上人は教えておられるのであります。**

「**一念信心を生ずれば一念の仏**」であるならば、願わくは、一生信心を貫いて、生涯の仏たらんことを願いきって、この世を生きることをそれ自体が楽しくて楽しくてたまらない、というような遊樂の人生を、生ききってまいりたいと思いますけれども、いかがでしょうか。一と。(私見)これこそが、**池田先生の本当のご指導なのです。**また、以下も拝しました。

「御書の世界」(上)(池田大作全集第32巻)

「**智慧の宝珠**」の体験、御修学、そして**立宗**

斎藤 誓願を立てた若き大聖人は必死に祈り、研鑽されました。そして、**十六歳で正式に出家してから程ないころ、清澄寺の本尊の虚空蔵菩薩像に祈願し、その虚空蔵菩薩から明星のような「智慧の宝珠」を得られた**と御書にあります。その智慧によって、当時の八宗・十宗の教義の大綱を把握できたと仰せです。

池田 諸宗、諸経の肝要を知る智慧とは、仏法の根本にかかわる智慧です。

**要するに、妙法の智慧を開かれたのです。**民衆を根本から救いたいとの大誓願を持ち、必死に求道され、開覚されたのです。

斎藤 仏の悟りを開いたと拝察していいのでしょうか。

池田 **わが身の法性を、豁然と開覚されたと拝することができます。凡夫の身に仏性を開かれたのです。**

斎藤 弱冠十六歳の若さで、悟りが得られるものでしょうか。

池田 どうすれば民衆を救えるかという深く真剣な祈りのゆえに、智慧の宝珠を得られたと拝される。大事なことは、大聖人がそれを到達点とされたのではなく、この悟りを出発点としてさらなる求道の道に入っていかれたことです。

斎藤 三十二歳の立宗まで、鎌倉や比叡山などで修学されます。

池田 大聖人の誓願は、恩ある人々を救うために日本第一の智者になりたいということです。その誓願を、御遊学を通して末法全体を救済したいという誓願に深められていった。そして、広宣流布の大願として確立され、**立宗宣言に至る**。自分だけ悟りに安住するのは、ある意味では簡単です。大聖人の場合は、常に民衆を救い、末法の時代を現実に転換するための智慧を求めておられる。自分に悟りがあったからといって、それで終わりではない。常に「誓願」があって「悟り」がある。立宗後も、大難を越えられながら誓願を貫くことによって、悟りを深められ、**ついには発迹顕本されて、末法の御本仏の御境地を顕されていくのです。**—と。

(私見) 上記、**池田先生の本当のご指導**を拝すれば、「教学要綱」の論調は終始一貫「法華経」に付度し、日蓮大聖人を軽視だ。結論、これでは、**日蓮仏法の真義、正義**を伝えていない。**要するに『教学要綱』には日蓮大聖人に対する信仰心がないのです。だから「日蓮はこういうものだ」と規定する傲慢な命が出てしまうのだ。**この大悪を知っていながら放置していたのではこちらが「**仏法の中の怨**」になってしまいます。ゆえに、私は今回の拙文も日蓮仏法と池田先生の本当のご指導を厳守するべく、池田門下生の責務、使命感を胸に「教学要綱」の重大な不正、邪義について、以下、破邪顕正します。 \*\*\*\*\*

まず、池田先生のご指導に全く違背の**「教学要綱」の重大な不正、邪義17**を示します。**太字下線部**は特に酷い表現である。

1. 久遠実成の釈尊 『法華経』の後半(本門)では、如来寿量品第十六において、釈尊の「久遠実成(釈尊は遙か昔の過去世において成仏したこと)」が説かれている。(27頁) —とだけで**「五百塵点劫」の成道の本因も、寿量品の深義「我本行菩薩道」も一切記述がない!**

2. 『法華經』には、現実には亡くなった歴史上の釈尊と、「永遠の仏」としての釈尊の関係が示されている（中略）久遠実成の仏は、実は娑婆世界に存在し続け、衆生が仏を求めて身を惜しまず仏道修行に励むならば、いつでもその衆生のもとに出現する（28頁）

3. 一二五三年（建長五年）、故郷に帰った日蓮大聖人は、『法華經の』の肝心である「南無妙法蓮華經」を根本の教え（宗）とする立場を清澄寺で宣言された。（立宗宣言）（40頁）

4. 大聖人は、「一生成仏」を説き、『法華經』の信仰実践によって、自身の内なる仏界を開発し、何ものにも屈しない智慧と慈悲と活力を発揮して苦難を乗り越えていく生き方を教えられた。（40頁）

5. 竜の口の法難・佐渡流罪の以前と以後（「佐前・佐後」とも称される）において、大聖人の立場が明確に転換している（中略）それは釈尊から滅後悪世の弘通を託された地涌の菩薩、なかなづくその筆頭である上行菩薩としての役割を果たす立場である。（43頁）

6. 大聖人は自身を「如来の使い」「教主釈尊の御使い」と位置づけ、「教主釈尊の勅宣を頂戴して」『法華經』を説いている（45頁）

7. 日蓮大聖人は末法の衆生の救済を釈尊に代わって行う「末法の教主」（47頁）

8. 日蓮大聖人が末法の衆生が成仏するための教えを探究し、『法華經』の肝心として「南無妙法蓮華經」を選び取っていかれた（68頁）

9. 大聖人は『開目抄』に『一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり』と述べ、『久遠実成が説かれた如来寿量品第十六の文の底に、「法華經」の肝心である一念三千の法門が示されていると洞察された（70頁）

10. 大聖人御自身が竜の口の法難を契機に、釈尊から「南無妙法蓮華經」を付嘱された上行菩薩の使命に立ち、自らその「南無妙法蓮華經」を覚知したという究極的な自覚に到達されたことを意味する。そして、竜の口の法難以降、大聖人は、その自覚の上から文字曼荼羅を顕されていったのである。（76頁）

11. 「観心本尊抄」(一二七三年〈文永十年〉四月)には、「その本尊の為体は、**本師**の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇士たる上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸の菩薩は万民の大地に処して雲客月卿を見るがごとく、十方の諸仏は大地の上に処したもう。迹仏・迹土を表する故なり」(御書一三六頁)と述べられている。

この記述のように、文字曼荼羅の御本尊は巨大な宝塔に釈尊が多宝仏と並んで座り、地涌の菩薩への付嘱を行う、『法華經』の虚空会の儀式を用いて顕されている。そして、地涌の菩薩に託された法である「南無妙法蓮華經」を中心に大書され、釈尊や多宝仏、上行菩薩等の四菩薩をはじめとする仏・菩薩などが周囲に配されている。この「南無妙法蓮華經」の文字曼荼羅の御本尊は、大聖人の内面に確立された仏の覺りの境地を顕したものである。(76, 77頁)

12. 大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが、首題の「南無妙法蓮華經」の脇士に位置づけられている(78頁)

13. 「本門の教主釈尊を本尊とすべし」の意味は、それに続く文で、「いわゆる宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏ならびに上行等の四菩薩、脇士となるべし」と具体的に説明されている。」(80頁)

14. 日蓮大聖人は単に釈尊から託され「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁)

15. 如来神力品第二十一において釈尊は上行菩薩等の地涌の菩薩に付嘱を行うが、日蓮大聖人がその付嘱の法こそ「南無妙法蓮華經」であると覺知された(中略)大聖人がその「南無妙法蓮華經」を具体的に三大秘法として示し、末法の衆生の成仏のための修行方法を確立して、それを弘通した(92頁)

16. 創価学会は、大聖人が覺知し説き示された一大秘法である「南無妙法蓮華經」を法宝として尊崇(158頁)

17. 現代において「南無妙法蓮華經」を正しく伝持する教団である創価学会が、僧宝に当たる(159頁)一と、以上17です。

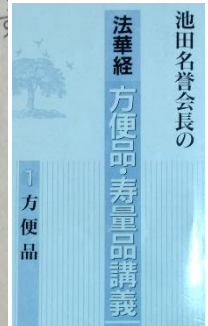
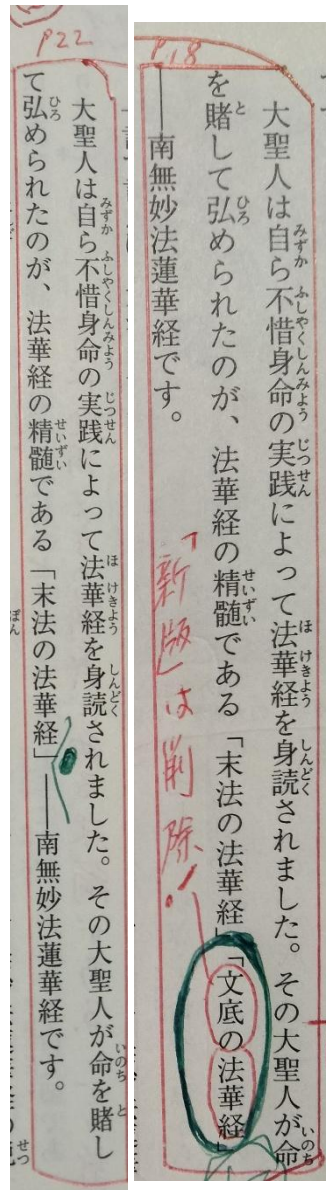
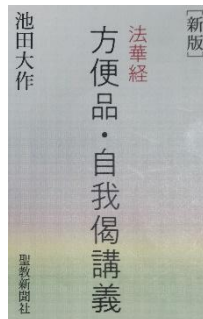
\*\*\*\*\*

上記「教学要綱」の不正、邪義17について、以下、まずは、**総論的に10項目破邪顕正**します。なお「教学要綱」を以下、「要綱」と略します。 6/61



1. 「要綱」は池田先生のご指導—「文底」が説かれて**仏法は完結**(「法華經の智慧」如来神力品(池田大作全集第29-31卷)—のご指導を全く無視、法華經の文上解釈、釈尊だけからの論述に終始。よって一日蓮は「教主釈尊の御使い」(45頁)、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁)等—の酷い**文上論**だ。(後に詳述)

そして、「要綱」発刊の前年2022年に発刊の「新版」法華經方便品・自我偈講義では、**池田先生の本当のご指導**を75カ所も、**削除、変更、改竄、冒頭**、右のように先生の最重要のご指導—「**文底の法華經**」を削除して作文のスタートである！



(75カ所について本稿25頁以降に掲示)

**\* 池田先生の本当のご指導の改竄！**

「**文底の法華經**」をなぜ削除するのか！

「**文底の法華經**」は**南無妙法蓮華經**！

これを削除では「新版」は意味がない！

なぜ「**末法の法華經**」だけにしたか？

こんなことが許されるのか！

また、「新版」は**人法一箇**も全て削除！

**久遠元初の自受用身**も全て削除！ 7/61

2. 「要綱」の最大、最悪の態度は、上記1の具体化と思われる、法華經文上の「教主釈尊」をそのまま読むことに固執して、**池田先生がご教示される文底からの解釈、論述をしないこと**である！「池田会長講演集」第2巻には**一教主釈尊**

教主釈尊といっても、**教主釈尊には六種類**あります。第一に蔵教の釈尊、これは小乗經を説く仏です。第二に通教の釈尊、第三に別教の釈尊、これら通・別の仏は権大乘教の教主であります。第四に法華經迹門の釈尊、これは実大乘教の法華經迹門を根底とする仏であり、三千の昔から化導が始まっております。第五に法華經本門文上の釈尊、これは第四の迹門の釈尊とは違い、**五百塵点劫という遠い過去**より衆生を教化してきた仏であります。釈迦仏法においては本門文上の釈尊が究極に位する仏であります。**第六に法華經本門文底の釈尊があります。すなわち、久遠元初自受用身・即南無妙法蓮華經の教主・日蓮大聖人**であります。

このように、教主釈尊といっても教法によって六種の相違があるわけです。釈尊という名は同じでも体が異なることを知らなければなりません。**末法今日、教主釈尊とは、最高の法たる妙法を私達民衆に説き示した日蓮大聖人**であります。大聖人の御命は妙法の当体であり、そのご生命を一幅の御本尊に顕現され、書き顕わされたのであります。すなわち、御本尊は宇宙生命の縮図ともいえます。**御本尊は人法一箇でありますから、人に約すならば、日蓮大聖人とも教主釈尊とも仏とも拝するのです。**名は異なってもその実体は同じであります。(中略)法華經には**三種類**あります。第一は釈迦の説いた法華經二十八品、第二は天台大師の論じた摩訶止観という法華經、**第三は日蓮大聖人が唱えた南無妙法蓮華經——五字七字の法華經**の三つです。**五字七字の法華經こそ末法万年尽未来際**の衆生を救いきり、人類を救うことのできる**根本法**であり、それが御本尊です。一と。

3. さらに、「要綱」の最悪さは、「法華經の智慧」を紹介しているにも拘わらず「法華經の智慧」寿量品の**最高のご教示**—**釈尊の師は南無妙法蓮華經如来**—を無視して文上解釈に終始、釈尊の下に日蓮大聖人を貶めていることである！

寿量品の講義には—

**池田** 法と人(仏)は本来、不可分なのです。「如来」というのも「如(真如・真実の世界)からやって来たもの」ということです。すなわち「如来」とは、真の「法」が現実の上に表れたのです。宇宙生命に“人”の側面と“法”の側面があり、それが一体なのです。少しむずかしいかもしれないが、大事なところなので、もう少し言っておこう。釈尊の説法に「**法を見る者は我を見る、我を見る者は法を見る**」(相応部經典(犍度篇)「長老品・跋迦梨」)という言葉がある。法を体得すれば釈尊に会うことができ、釈尊に会えば法を悟れるという意味です。「我を見る」の「我」とは、根本的には「永遠の法」と一体となった「永遠の仏」です。

寿量品では、永遠なる「**常住此説法**(常に此に住して法を説く)」(法華經四八九ページ)の仏身を説く。文上の法華經では、**五百塵点劫以来の「久遠実成の釈尊」**のことだが、その指向しているのは**無始無終の「久遠元初の仏」**です。 8/61

釈尊が悟った「永遠の法」即「**永遠の仏**」はあらゆる仏が悟った「永遠の大生命」であった。過去・現在・未来のあらゆる仏は、ことごとく**釈尊と同じく「久遠元初の仏」を師として悟った**のです。それが**久遠元初の自受用身であり、南無妙法蓮華経如来**です。戸田先生は言われた。「**日蓮大聖人の生命というもの、われわれの生命というものは、無始無終ということなのです。これを久遠元初といいます。始めもなければ、終わりもないのです。大宇宙それ自体が、大生命体なのです**」と。無始無終で慈悲の活動を続ける、その**大生命体を「師」として「人間・釈尊」は人間のまま仏となった**のです。そして悟ったとたん、三世十方の諸仏は皆、この**人法一箇の「永遠の仏」を師**として仏になったのだとわかったのです一と。

(私見) 上記、池田先生のご指導こそ最重要であり、これこそが、「教学要綱」を、完璧に破邪顕正出来るご指導と拝します。

#### 4. 「要綱」の最悪の不正記述二つを糺す。

ひとつは、**一大聖人は自身を「如来の使い」「教主釈尊の御使い」と位置づけ、「教主釈尊の勅宣を頂戴して」『法華経』を説いている。これは自身こそ上行菩薩の働きを行う者であるという自覚を表明されたものである。(45頁)一と。**

これに対しては、**池田先生の以下ご指導**で反証する。一

一日蓮大聖人は、末法の御本仏であられる。釈尊、三世十方の仏・菩薩をも引き連れていく身であられる。(池田大作全集 88 巻、297 頁) (私見) 「要綱」は**池田先生のご指導とは全く違背の作文である。末法、現代において法華経を文上から解説することは、やってはならないのだ!**

二つ目は、**一日蓮大聖人は、ただ単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩(91頁)一とあり、「要綱」は、全編を通して何十箇所においても、大聖人を上行菩薩に留め置き、また、末法の期間限定付きの御本仏にすることである。**

この邪義に対して、**池田先生の本当のご指導は以下**である。

一「法華経の智慧」如来神力品には一百六箇抄にはこう仰せだ。(「本門付属の本迹」)**「久遠名字の時・受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付囑は日蓮今日寿量の付属と同意なり」**むずかしいが、要するに**久遠以来、名字即の凡夫のまま日蓮大聖人が南無妙法蓮華経の本法を所持しておられる。**

それが「本」。それから見れば、法華経の経文上の上行菩薩等の儀式は「迹」になる。**経文は、大聖人が事実として妙法を広宣流布されるための「予証(あらかじめ出す証拠)」であり「文証」です。「南無妙法蓮華経如来」が、法華経二十八品というスクリーンに「影」を映した結果、久遠実成の釈尊(仏界)や上行菩薩(九界)の姿になったのです。だから、どこまでも妙法が「本」、上行菩薩は「迹」です。一と。(私見) 「要綱」は、この池田先生の本当のご指導を拝さなければならぬ!**

5. 「要綱」は、法華經の最重要の「**我本行菩薩道**」について池田先生の以下、本当のご指導である「法華經方便品・寿量品講義」（1996年）を全く無視している！そして、「要綱」発刊前年の「新版」でも、同じく無視、**池田先生のご指導**の全く反対の一改竄—をしている！私は、昨年、「新版」の変更、削除、改ざんの75カ所を取り上げたが、以下の内容は、数日前に気づいた**第76番目の恐ろしき変更、改竄である！法華經文上に日蓮大聖人の「南無妙法蓮華經」が示されている！との大妄語！**これは断じて許せない。学会員をどれほど騙すのか！ 以下が「要綱」の記述である。一如来寿量品第十六で久遠実成が示されたことで、釈尊に久遠以来、仏界が具わっていたことが明かされた。そして、「**我は本菩薩の道を行じて**」（法華經四八二頁）と説かれるように、その久遠の仏身にも菩薩界を代表とする九界が具わることが示された。ここに無始無終にわたる十界互具が明示されたのである。そのことを「開目抄」には、「**本門にいたりて(中略)本門の十界の因果をと**き顕す。これ即ち本因本果の法門なり。**九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備わって、真の十界が互具・百界千如・一念三千なるべし**」（御書六六頁）と述べられている。大聖人は天台大師が「摩訶止観」で説示した一念三千の観法と、一念三千の観法によって覚知し体得した究極の法を、どちらも一念三千と呼んだが、その意義を明確に立て分けられた。そして、後者を「**まことの一念三千**」「**真の十界互具・百界千如・一念三千**」（同頁）と位置づけ、それは『法華經』本門に示されているとされたのである。（111, 112頁）—と。

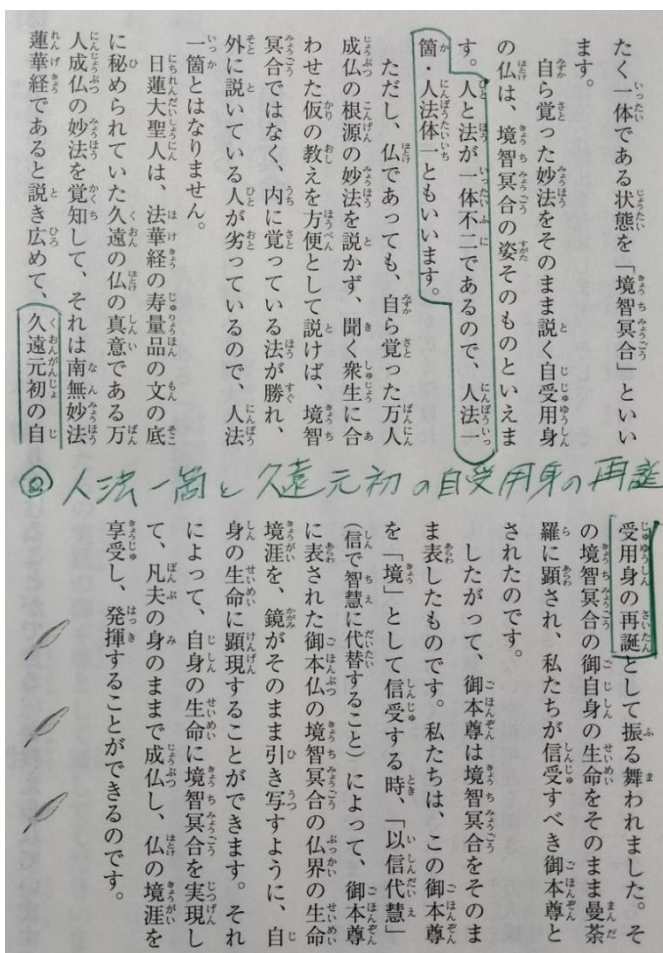
（反証）「法華經方便品・寿量品講義」3寿量品—2の16～18頁には—大聖人は「開目抄」で、「本因・本果の法門」について次のように仰せです。「**九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし**」この「無始の九界」「無始の仏界」とは、それぞれ本因・本果のことで、それが久遠の仏の一身において互具しているのです。その十界互具・一念三千の生命が常住不滅なのです。**ただし、**文上では悟りを開き示した仏（本果）の生命に、本果だけでなく本因もあることを述べている。**つまり文上はあくまで本果が表**です。これに対して大聖人の仏法では本因を表に立てます。九界の凡夫が中心です。救うべき末法の衆生とは凡夫だからです。そのために本因妙を表す「**我本行菩薩道**」の文が、再び注目されなければなりません。すなわち久遠において凡夫の釈尊が菩薩道を実践して無量の智慧の寿命を成就した、その原動力はそもそも何であったか。—それこそが南無妙法蓮華經にほかならないのです。**南無妙法蓮華經は「我本行菩薩道」の文の底に秘されているのです。**大聖人が「開目抄」で「**一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり**」と仰せの「寿量品の文の底」とは、まさに「**我本行菩薩道**」の文底にほかなりません。—と。

（私見）それなのに、「新版」295頁でも—上記、**原本の—南無妙法蓮華經は「我本行菩薩道」の文の底に秘されているのです—が—一文の底に示されている—**に改竄！である。「**底にしづめたり**」と「**示されている**」は違う！ 10/61

6. 「要綱」は第1章 55頁で池田先生の「法華経の智慧」「法華経方便品・寿量品講義」「御義口伝講義」を掲示しているにもかかわらず、その論述は池田先生の本当のご指導に完全に乖離、否、違背している。これは「要綱」5頁、発刊にあつての—三代会長の指導のままに—にも完全に違背し自語相違である。(後に詳述)

7. 「要綱」は学会創立以来93年間の教義—日蓮大聖人は久遠元初の自受用身—と—日蓮大聖人の曼荼羅御本尊は人法一箇のご当体である—を何の理由もなく捨て去り一切記さない。これほどの不正、池田先生への背信はない！(後に詳述)

8. 「要綱」は冒頭から、法華経の最重要事である「五百塵点劫の当初(それ以前の意味)」を記さない。また、「南無妙法蓮華経」が秘し沈められた御文である「我本行菩薩道」も一切記さず論述を開始している。これでは法華経論として画竜点睛を欠き、その結果、本源である日蓮仏法の教学書とは言えない。(後に詳述)



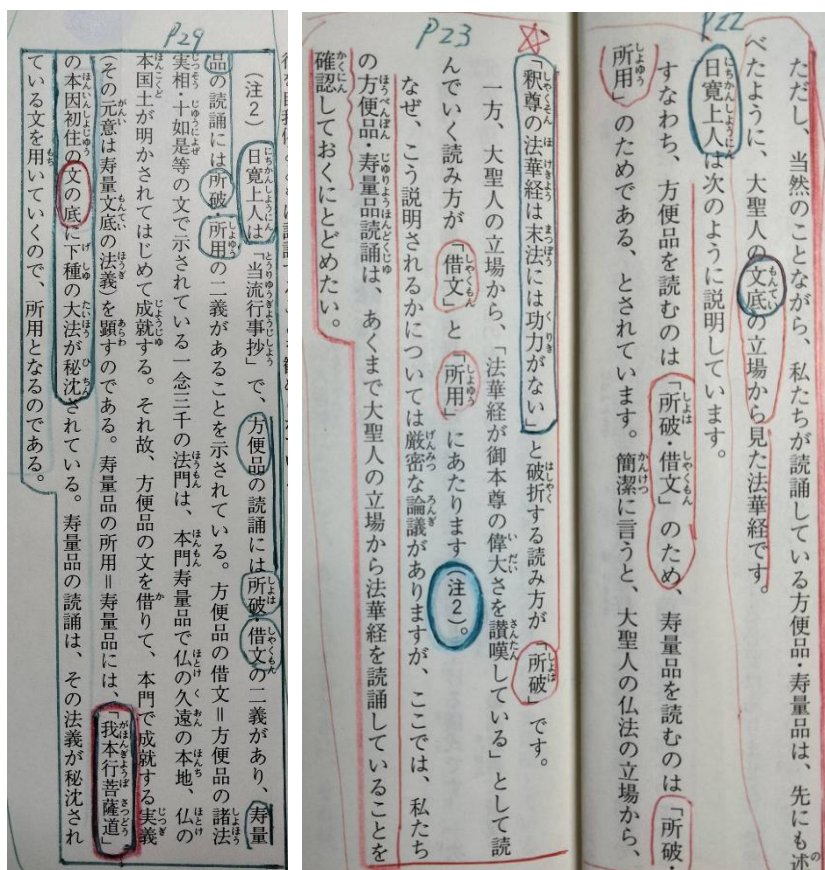
9. 「要綱」(2023年刊)は、8年前の「教学入門」(2015年刊)の記述と完全に齟齬する。なぜ同じ教学解説書でありながら、教義を変更したのか? 「要綱」にはその理由が全くない。また、「教学入門」は教学部編と明記であるのに、「要綱」は—『創価学会教学要綱』刊行委員会—である。これでは、教学部の責任回避と言わざるを得ない。

左「教学入門」208頁には、一人法一箇と日蓮大聖人は久遠元初の自受用身(の再誕)と明示だ! それをなぜ「教学要綱」は理由も示さず、無視、捨て去ったのか! こんなことは許されない!(後に詳述)

\*ただし、「教学入門」は五重の相対を示さず、日蓮仏法の本義を完全には述べていないことに注意が必要である。

10. 「要綱」は第4章150頁で「日寛教学を引き続き重んじていく」と記すが、本文中には日寛教学を一切引用、紹介しない。これも整合性に欠け、自語相違でもある。

また、前述の1と同様、以下、池田先生の「法華経方便品・寿量品講義」第1巻には、日寛教学が明記であるが、「新版」は削除である！



左には、日寛教学の一

**釈尊の法華経は末法には功力がない—また—「我本行菩薩道」の本因初住の文の底に下種の大法が秘沈—と明確にご教示である。それが、「新版」では削除の暴挙！である。**

\*\*\*

大聖人は立宗宣言で南無妙法蓮華経を獅子吼されたのです！日寛上人はその唱題行こそが正行であり、方便品・寿量品の読誦は助行とご教示！

さらに、日寛上人は、上記、方便品の読誦は「所破・借文」、寿量品の読誦は「所破・所用」と分かり易く御教示なのです。その題目の根本義を「教学要綱」は示さない！これでは、日蓮仏法の本義、また勤行の意義を示さない欠陥の作文であり「要綱」とは言えないと断じます。しかも繰り返しになりますが、上記「法華経方便品・寿量品講義」に記述の日寛上人の最重要のご教示を、「要綱」発刊の一年前2022年発刊の「新版法華経方便品・自我偈講義」では、これまた何の理由もなく全て削除の暴挙（注2）を削除）である。日蓮仏法の根本義を記さない。ゆえに「要綱」も「新版」共に臥竜点睛を欠く不正の作文としかいえない！

\*\*\*-----\*\*\*

以下、日寛上人の御教示がどれほど深く素晴らしいか、「法華経の智慧」の鼎談者須田晴夫氏の著作「日興門流と創価学会」（216, 217頁）を紹介します。12/61

以下、文末に明記された「本因妙抄」の**日寛上人の御垂教**がいかにかに正しいか。日寛上人が**種脱相對の奥義である一念三千が南無妙法蓮華經**であることを教示され、それが「教学要綱」以前の学会教学93年間の根本であったのです。それを「要綱」は何の理由も示さず捨て去ったことがいかにかに不正であるか。**学会員を惑わせる暴挙**以外の何ものでもない。



ついで日寛は下種の一念三千が法華經本門のどの文の文底にあるのかという問いについて他門流から出されていた諸説を破折し、「師の曰わく『本因初住の文底に久遠名字の妙法、事の一念三千を秘沈し給えり』云々。まさに知るべし、後々の位に登るは前々の行に由るなり云云」（同五五頁）と富士門流の教義を明示する。

すなわち事の一念三千である久遠名字の妙法（南無妙法蓮華經）は、積尊が成道する以前に成仏するための本因として初住位において菩薩道の修行していたことの文底に示されているとしている。天台教学においては積尊の五百塵点劫の成道（本果）の本因は寿命品の「我もと菩薩の道を行じて」（法華經四八二頁）の文とされているので、日寛は南無妙法蓮華經が文底に示されている文は「我もと菩薩の道を行じて」（我本行菩薩道）の文であると規定したことになる（日寛は「開目抄愚記」ではさらに明確に「故に知んぬ、『我本行菩薩道』の文底に久遠名字の妙法を秘沈し給うことを」（文段集七七頁）と述べている）。

菩薩の位である五十二位の中の十住の初めである初住位は不退転の位であるから、初住位に登れば実質的に成仏が確定したことになる。ただし、その位に登るためにはその

ための修行が必要なので、積尊をして初住位に至らしめた本因の修行こそが妙法（南無妙法蓮華經）の修行となる。寿命品は積尊が五百塵点劫において成道した原因として成道以前に菩薩の修行をしていたというのであるから、修行したという以上、修行の対象となる何らかの法がなければならぬ。積尊はその法の力によって成仏できたのである。積尊を成仏せしめた能生の法こそが南無妙法蓮華經であり、積尊はその妙法によって成仏させてもらった所生の存在に過ぎない。したがって五百塵点劫成道の積尊は真の根源仏にはなりえず、妙法から生み出された迹仏と位置づけられるのである。

本因初住の文底に事の一念三千が秘沈されていることについて日寛は「師の曰わく」としていることで、その教義が富士門流に伝わる日蓮以来の相伝とされていることが分かる。事実、種脱相對の一念三千とは何かとの問いに対して日寛は「これすなわち蓮祖出世の本懐、当流深秘の相伝たり。いづくんぞ筆頭に顯すことを得んや」（『六巻抄』五五頁）としながらも、相伝の内容が既に他門流に流出していてもはや秘密にしておくことができない状況を踏まえ、あえて「本因妙抄」の文を提示している。その文とは「一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば、一部共に理の一念三千、迹の上の本門寿命ぞと得意せしむることを脱益の文の上と申すなり。文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達（じきたつ）の正観、事行の一念三千の南無妙法蓮華經これなり」（八七七頁）の文である。日寛は「本因妙抄」の文を開示することによって種脱相對の事の一念三千が南無妙法蓮華經であることを根拠づけたのである。

上記の総論的な不正、邪義が「要綱」全編において多数の文脈に見られ、その内特に酷い17について、以下、**池田先生の本当のご指導である**「法華經の智慧」と「法華經方便品・寿量品講義」他の文証をもって破邪顕正します。また、この二つ以外にも「御義口伝講義」他からも反証を示します。なお、池田先生の「法華經方便品・寿量品講義」の**原本ご指導が**「新版法華經方便品・自我偈講義」（以下、「新版」と略）では、何と**75カ所も変更、削除、改ざん**されている。私はその実態を、昨年11.18に、<https://share.google/d2ZTGuuZHgKPHKMZX>で皆様に明らかにしました。今回、「要綱」17の邪義についてもこの11.18拙文からも引用し破邪顕正の論証をします。このような改ざん等は絶対にしてはならないことであり、皆様に何度も確認して頂きたいと思っています。どうぞご参考下さい

\*\*\*\*\*

以下、「教学要綱」の重大な不正、邪義17の主要部について破邪顕正する。なお、池田先生の「法華經方便品・寿量品講義」からの**反証**については「新版」での削除、変更、改竄の実態も、本拙文25頁以降でご参照下さい。

1. 久遠実成の釈尊 『法華經』の後半(本門)では、如来寿量品第十六において、釈尊の「久遠実成(釈尊は遙か昔の過去世において成仏したこと)」が説かれている。(27頁) —と結果だけで、「五百塵点劫」の成道も、「我本行菩薩道」についても一切記述が無い！

(反証)「法華經の智慧」如来神力品に—

池田 御本尊の相貌は、中央の「南無妙法蓮華經日蓮」の脇士として、**釈迦如来**と多宝如来が示されている。そのまた脇士として地涌の四菩薩が示され、重々の脇士になっている。事蹟本は、この脇士の「**釈迦如来**」の一身のことです。**五百塵点劫**という、はるかな昔に成仏しましたという「**本果**」を示した。また、その本果の功德として長遠の寿命とあらゆる衆生を救う無限の智慧と慈悲を示した。その説法を聞いて、ではその偉大な「**本果**」とはいかなる「**本因**」から生まれたのか、本果の功德が帰する「**根源**」は何か—それがわかったのが、理蹟本を悟ったことになる。遠藤 久遠の成仏の原因については、寿量品に「**我本行菩薩道(我本、菩薩の道を行じて)**」(法華經四八二ページ)とだけありますが、その文の「**文底**」に、**成仏の「本因」がある**。これが「**文底**」の意味です。(中略)

「**文底**」が説かれて仏法は完結

池田 寿量文底の「**仏因**」とは、**言うまでもなく無始無終の妙法であり、南無妙法蓮華經です。これは「**仏因**」であると同時に「**仏果**」です。「因果俱時・不思議の一法」です。これを寿量品の説法を聞いて覚知したのです。寿量品を虚空会上の”三十二相の、きらびやかな**釈尊の話**”と思ったら間違いです。その色相莊嚴の仏を見上げているだけなら、所詮は”他人ごと”になってしまう。そうではなく、**五百塵点劫の説法で**どんどん過去にさかのぼっていったあげく、自分の究極の”**原点**”は釈尊の”**原点**”と同じであったと分かったのです。”**虚空**”を見上げていて、はっと”**足もと**”に気づいたのです。**これが「**等覺一転名字妙覺**」です。****

(**成仏の本因が南無妙法蓮華經如来**であることを述べた文。等覺という最高位の菩薩でも、久遠元初の妙法を覚知して、「**等覺**」から一転して「**名字即**」という凡夫の位になり、そこから直ちに仏の位である「**妙覺**」になること) —と。

(私見) 上記より **釈尊の成道の本因は、人法一箇の南無妙法蓮華經即日蓮大聖人** によると確定される。なお、「要綱」が五百塵点劫について記さない理由は、「要綱」発刊の前年2022年に発刊の「**新版**」で、**五百塵点劫の意味を大改竄**しているからである！以下、本拙文の36頁の36番と37番を参照ください。**大変な事態です！**—

36. (池田先生の原本ご指導)「講義」61頁には—「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、**十界常住の南無妙法蓮華經の御本尊**です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わっている**御本尊が現れ**、その功德が開かれてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別して、そして「**久遠元初**」とも**言うのです—**。しかし、「新版」212頁では—「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、それは「**永遠の法**」である**南無妙法蓮華經と一体**です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わる**南無妙法蓮華經の働き、功德が、わが身に開かれ現れてくる**ということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別して「**久遠元初**」と表現することがあります。—に変更。

(私見)なぜ、**御本尊を削除**して、永遠の法である南無妙法蓮華經と一体に変更か？  
なぜ、それほどまでに**御本尊様を消したいのか？**

そして、永遠の法、つまり単法に貶めたいのか！また、「**久遠元初**」と表現することがあります？これでは、**池田先生のご指導への冒瀆だ！**

37. さらに、同頁には—「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すという**だけではありません**。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”です—と。**しかし「新版」212頁では—「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すということでは**ありません—**に変更。** —と。つまり、**法華經と日蓮仏法の根本教学を大改竄だ！だから翌年の「要綱」は五百塵点劫の本義について何も記さない、記せないのだ！**

2. 『法華經』には、現実には亡くなった歴史上の釈尊と、「**永遠の仏**」としての**釈尊**の関係が示されている(中略)久遠実成の仏は、実は娑婆世界に存在し続け、**衆生が仏を求めて身を惜しまず仏道修行に励むならば、いつでもその衆生のもとに出現する**(28頁)

(反証)「**法華經の智慧**」如来寿量品に—  
遠藤 先ほど、寿量品の「発迹顕本」の意義についてうかがいました。**釈尊は、「永遠の法」即「永遠の仏」を師として仏になった**。釈尊が師としたのと同じ永遠の法即仏を師とせよ、と弟子たちに説き明かしたのが発迹顕本である。そこには、“「人間・釈尊」に帰れ！そして**釈尊を仏にした根源に直達せよ！**”との力強いメッセージが込められていた。—こうしたお話を、目の覚める思いがしました。齊藤 この「永遠の法」とは南無妙法蓮華經であり、「**永遠の仏**」とは南無妙法蓮華經如来すなわち**久遠元初の自受用身のこと**ですね。 15/61

**池田** **そうです。南無妙法蓮華經は法であるが、同時に仏身なのです。人法一箇です。**ここが大事なところですよ。「法」といっても「人（仏）」を離れた法は、「理」だけの存在です。実際には一「事」の上では一仏の智慧を離れた法というのはないのです。**久遠元初の仏**—無始無終の常住の仏は、宇宙生命そのものであり、一瞬の停滞もなく、常に不断に、一切衆生を救おうと活動しておられる。その仏と自分自身が、じつは一体であり、自分自身が久遠の昔から人々を救うため、広宣流布のために働いてきたのだ、今だけのことではないのだ—そう自覚するのが**寿量品の心**です。（私見）結論、上記池田先生の本当のご指導に反した「要綱」の一「**永遠の仏**」としての**釈尊**—は、上記1番の（反証）と合わせて、不正、邪義なのです。

3. 一二五三年（建長五年）、故郷に帰った日蓮大聖人は、『法華經』の肝心である「**南無妙法蓮華經**」を**根本の教え（宗）とする立場**を清澄寺で宣言された。（立宗宣言）（40頁）  
（反証）これについては、本拙文の1頁以降に詳述済みです。

4. 大聖人は、「一生成仏」を説き、『法華經』の**信仰実践によって、自身の内なる仏界を開発し**、何ものにも屈しない智慧と慈悲と活力を発揮して苦難を乗り越えていく生き方を教えられた。（40頁）

（反証）「法華經の智慧」方便品には一御本尊を信じ、「南無妙法蓮華經」と唱えることによって、自身（諸法）が妙法の当体（実相）と輝くのです。まさに万人に開かれた「一生成仏」の修行法です。—と。（私見）即ち、「**教学要綱**」の一「**『法華經』の信仰実践によって、自身の内なる仏界を開発し**—ではない。法華經の文上を信仰するのではない！あくまで、**文底の南無妙法蓮華經であり、それを表された「御本尊」への信仰でしか、仏界は湧現、開発は出来ない！**

5. 竜の口の法難・佐渡流罪の以前と以後（「佐前・佐後」とも称される）において、**大聖人の立場が明確に転換**している（中略）それは釈尊から滅後悪世の弘通を託された地涌の菩薩、なかなずくその筆頭である**上行菩薩としての役割を果たす立場**である。（43頁）

（反証）「法華經方便品・寿量品講義」1-65~66頁に「**開目抄**」に「**日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて**—日蓮と言っていた者は去年（文永八年）九月十二日子丑の時（夜半すぎ）に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである—と。

この一節について、日寛上人は次のように述べられている。—「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ**久遠元初の自受用身と成り給い**、内証真身の成道を唱え、未法下種の本仏と顕れたまう明文なり」（「開目抄文段」第三十八段）と。すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の自受用身の生命を顕された—これが、大聖人の「**発迹顕本**」です。**大聖人の御内証の本地**—それは、**久遠元初の自受用身**であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」（御書759頁）です—と。なお、「新版」の誤りについても、本稿37頁38番を参照下さい。

\*\*\*

また、親友**中村誠**氏の著書「『**教学要綱**』と**牧口・戸田・池田三代会長の書物50冊余りとの比較検証**」の11, 12頁の以下論証は**玉稿**です！—

戸田先生は次のように述べている。「このとき（竜の口の法難を乗り越えられた時）に、初めて上行菩薩の垂迹の姿を捨てて、久遠元初自受用身如来の姿をあらわされるのです。これ以降はすべての御振る舞いが仏なのです。

その前は上行菩薩の再誕です。今後は久遠元初自受用身如来の御境地をあらわされるのです」（『戸田城聖全集』第7巻 種種御振舞御書講義 p. 561）

「大聖人の凡夫の御身が即久遠元初の自受用身と顕れ給う」（『戸田城聖全集』第6巻 p. 371）。ここでは上行菩薩は省略されているが、凡夫の御身が上行菩薩を指すことは明白である。

それでは池田先生の講義はどうであろうか。「日蓮大聖人は、竜の口法難において外用上行の迹をはらって、内証の境地たる久遠元初の自受用報身として、本を顕されました」（百六箇抄講義）。

戸田先生と全く同じことを述べられていることがわかる。

次の講演も全く同様の内容である。「幼少の時から、青年習学の時までの『理即凡身』から、建長五年四月二十八日、立教開宗後の『外用上行』としての『本化地涌の菩薩』の御身へと、更には、竜の口以降の『本有無作三身の本地仏身』へと、確たる順序を踏んで、そのご身分を明かされ」（『池田大作講演集』第6巻 蓮生寺落慶入仏法要）（中略）

これらは、ことごとく、竜の口の法難以降は久遠元初自受用身如来の再誕という解釈をしており、竜の口以降は上行菩薩の使命に目覚めたという『教学要綱』に沿った解釈（43頁）は皆無である。—と。

（私見）上記、中村誠氏の論証は、戸田先生と池田先生の師弟の道がどれほど完全であるかを示しています。そして、三代会長のご指導を拝しての中村誠氏の著書—『創価学会教学要綱』の意味するもの 牧口・戸田・池田三代会長との書物50冊余りとの比較検証（2026年）—は三代会長の本当のご指導を明示した玉稿です。

\*\*\*\*\*

6. 大聖人は自身を「如来の使い」「教主釈尊の御使い」と位置づけ、「教主釈尊の勅宣を頂戴して」『法華経』を説いている（45頁）

（反証）この酷い記述については、本拙文6頁で、以下述べました。—これに対しては、池田先生の以下ご指導で反証する。—日蓮大聖人は、末法の御本仏であられる。釈尊、三世十方の仏・菩薩をも引き従えていく身であられる。（池田大作全集 88巻、297頁） 17/61

(私見)「要綱」は池田先生のご指導とは全く違背の作文である。末法、現代において法華經を文上から解説することはやってはならないのだ!—と。

7. 日蓮大聖人は末法の衆生の救済を釈尊に代わって行う「末法の教主」(47頁)

8. 日蓮大聖人が末法の衆生が成仏するための教えを探究し、『法華經』の肝心として「南無妙法蓮華經」を選び取っていかれた(68頁)

9. 大聖人は『開目抄』に『一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり』と述べ、『久遠実成が説かれた如来寿量品第十六の文の底に、「法華經」の肝心である一念三千の法門が示されていると洞察された(70頁)

上記3つ、7, 8, 9については、1, 2と同様に、池田先生の「法華經方便品・寿量品講義」(原本指導)と「新版」の不正を引用し、まとめて以下に(反証)します。本拙文の32頁—24.「講義」25, 26頁には一小題「寿量品の題号の意義」のところに一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持されていた。そして、ひとまず上行菩薩の再誕としてのお姿をあらわしこの妙法を末法の衆生のために弘められたのです。このゆえに大聖人は寿量品の題号を「身に当る大事」とされたのです。—と。しかし、「新版」186頁では一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經と一体となられた。そして、上行菩薩としての自覚を示され—に変更。

(私見)池田先生のご指導—一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持、また、ひとまず上行菩薩の再誕—とご指導なのです!それをなぜ、「一体」などと、改竄するのか!—と揭示しました。この、池田先生の本当のご指導により、7—釈尊に代わって行う、8—「南無妙法蓮華經」を選び取っていかれた、9—示されていると洞察された、などの表現は、とんでもない不正、邪義なのです!

10. 大聖人御自身が竜の口の法難を契機に、釈尊から「南無妙法蓮華經」を付嘱された上行菩薩の使命に立ち、自らその「南無妙法蓮華經」を覚知したという究極的な自覚に到達されたことを意味する。そして、竜の口の法難以降、大聖人は、その自覚の上から文字曼荼羅を顕されていったのである。(76頁)

(反証)これも、上記5と同じく、「法華經 方便品・寿量品講義」1—65~66頁に—「開目抄」に「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」—日蓮と言っていた者は去年(文永八年)九月十二日の子丑の時(夜半すぎ)に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである—と。この一節について、日寛上人は次のように述べられている。—「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ久遠元初の自受用身と成り給い、内証真身の成道を唱え、末法下種の本仏と顕れたまう明文なり」(「開目抄文段」第三十八段)と。すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の自受用身の生命を顕された—これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人の御内証の本地—それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」(御書759頁)です—と。上記5と同じく本稿37頁38番、また、中村誠氏の玉稿を参照下さい。

11. 「観心本尊抄」(一二七三年〈文永十年〉四月)には、「その本尊の為体は、**本師**の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇士たる上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸の菩薩は万民の大地に処して雲客月卿を見るがごとく、十方の諸仏は大地の上に処したもう。迹仏・迹土を表する故なり」(御書一三六頁)と述べられている。この記述のように、文字曼荼羅の御本尊は、巨大な宝塔に釈尊が多宝仏と並んで座り、地涌の菩薩への付嘱を行う、『法華經』の虚空会の儀式を用いて顕されている。そして、地涌の菩薩に託された法である「南無妙法蓮華經」を中心に大書され、釈尊や多宝仏、上行菩薩等の四菩薩をはじめとする仏・菩薩などが周囲に配されている。この「南無妙法蓮華經」の文字曼荼羅の御本尊は、大聖人の内面に確立された仏の覺りの境地を顕したものである。(76, 77頁)

(反証)「御書の世界」(上)(池田大作全集第32巻)「観心の本尊」は「信心の本尊」**本師**には一 **池田 大事な点は、釈迦・多宝を本尊とするのではない**ということです。

**釈迦・多宝も南無妙法蓮華經によって成仏したのです。**どこまでも、成仏の根源の法である南無妙法蓮華經を本尊とするのです。そのことは、御本尊の相貌で、南無妙法蓮華經が中央に大きく認められ、その左右に釈迦・多宝が位置していることにも明らかです。一と。

(私見)上記「要綱」の記述—**御本尊は、地涌の菩薩に託された法である「南無妙法蓮華經」を中心に大書され**—とだけで、「南無妙法蓮華經 **日蓮**」のご説明になっていない！ **本師、即ち、日蓮大聖人が御本尊の中心であられるのに、なぜ、「要綱」はその根本義を無視して記さないのか。**また、**—大聖人の内面に確立された仏の覺りの境地を顕したもの—**と、これも、正確を期していない！本稿1頁で既述したように、**日蓮大聖人は「自解仏乗」なのである！** \*「要綱」の上記の記述はまさに日蓮大聖人のご本尊様への余りに、不十分、否、不正の記述である。私の親友**中村誠氏**の正論を後に引用しました。(本稿22~24頁)

12. 大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが、首題の「南無妙法蓮華經」の脇士に位置づけられている(78頁)

(反証) これは、4月2日の拙文—戸田城聖先生のご命日に、一邪義「寿量の仏」は釈尊—を糺す—JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/OSyp1HG6fUZVuTu2p>—にて詳述済みです。ご覧下さい。**この記述が、「要綱」の根本的不正、邪義である！**

13. 「本門の教主釈尊を本尊とすべし」(御書261頁)とは、「法華經」本門における釈尊が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅の御本尊を「本門の本尊」とすることであると解釈できる。文字曼荼羅の御本尊は、釈尊を久遠実成の仏ならしめた根本の法である「南無妙法蓮華經」を具現化した「本門の本尊」なのである。(80頁)

(反証) **池田大作著** 日蓮大聖人御書十大部講義第5巻の390頁には—**「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とある。これは人本尊を示されたものである。教主釈尊には多くの義があり、藏教、通教、別教、法華經の迹門、本問、文底のそれぞれに教主釈尊がある。いまここにおおせの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である。すなわち久遠元初の自受用身であらせられ、未法に日蓮大聖人と御出現の教主であらせられるのである。色相莊嚴の在世的釈尊は、法勝人劣であるが、久遠名字の教主釈尊は人法一箇であらせられる。ゆえに本尊となすところの教主釈尊とはまた、事行の一念三千の大曼荼羅であらせられるのである。一と。**(私見)上記、池田先生の本当のご指導により「要綱」の—**根本の法である「南無妙法蓮華經」を具現化した「本門の本尊」**—はただ単なる「単法本尊論」つまり「**人法一箇の御本尊**」を無視した完全な不正、邪義である。 19/61

14. 日蓮大聖人は、単に釈尊から託され「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩（91頁）  
（反証）この酷い記述についても、本拙文6頁で、以下述べました。— この邪義に対して、池田先生の本当のご指導は以下である。— 「法華經の智慧」如来神力品には一百六箇抄には、こう仰せだ。（「本門付属の本述」）

「久遠名字の時・受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付嘱は日蓮今日寿量の付属と同意なり」むずかしいが、要するに久遠以来、名字即の凡夫のまま日蓮大聖人が南無妙法蓮華經の本法を所持しておられる。

それが「本」。それから見れば、法華經の經文上の上行菩薩等の儀式は「迹」になる。經文は、大聖人が事実として妙法を広宣流布されるための「予証（あらかじめ出す証拠）」であり「文証」です。「南無妙法蓮華經如来」が、法華經二十八品というスクリーンに「影」を映した結果、久遠実成の釈尊（仏界）や上行菩薩（九界）の姿になったのです。だから、どこまでも妙法が「本」、上行菩薩は「迹」です。—と。

（私見）「要綱」は、この池田先生の本当のご指導を拝さなければならない！

15. 如来神力品第二十一において、釈尊は上行菩薩等の地涌の菩薩に付嘱を行うが、日蓮大聖人がその付嘱の法こそ「南無妙法蓮華經」であると覚知された（中略）大聖人が、その「南無妙法蓮華經」を具体的に三大秘法として示し、末法の衆生の成仏のための修行方法を確立して、それを弘通した（92頁） \* \* \* \* この表現は、大問題の不正なので、以下詳述します。

（反証）「法華經の智慧」如来神力品には—

齊藤 法華經では、「久遠実成の仏」から「上行菩薩」へと結要付嘱されます

池田 上行菩薩は本来、もともと、南無妙法蓮華經の当体です。もともと持っておられる法であるが、末法に南無妙法蓮華經を弘めていく資格というか、立場をたしかに認められているという「証拠」を示す儀式なのです。

遠藤 そうしますと……また「家督相続」の譬えで恐縮ですが（笑い）、親から財産をたしかに受け渡されましたよという「証文」のようなものでしょうか。

池田 そう言ってもよいと思う。神力品の文は「証文」です。「証文書」であるということは、妙法そのものから見れば「迹」です。

池田 たとえば、一千万円を親から受けついただとする。それも、一つの「付嘱」です。この一千万円それ自体は「本」です。受けついただという「証文書」は「迹（影）」です。「本」と「迹」には、天地の差がある（中略）百六箇抄にはこう仰せだ。（「本門付属の本述」）

「久遠名字の時・受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付嘱は日蓮今日寿量の付属と同意なり」むずかしいが、要するに、久遠以来、名字即の凡夫のまま日蓮大聖人が南無妙法蓮華經の本法を所持しておられる。それが「本」。それから見れば、法華經の經文上の上行菩薩等の儀式は「迹」になる。經文は、大聖人が事実として妙法を広宣流布されるための「予証（あらかじめ出す証拠）」であり「文証」です。「南無妙法蓮華經如来」が、法華經二十八品というスクリーンに「影」を映した結果、久遠実成の釈尊（仏界）や上行菩薩（九界）の姿になったのです。だから、どこまでも妙法が「本」、上行菩薩は「迹」です—と。

（私見）上記より「教学要綱」の一付嘱の法こそ「南無妙法蓮華經」であると覚知—は大間違いである。さらに、以下、重要なことを追記します。それは—この誤解の招きやすい解釈を「新版法華經方便品・自我偈講義」はしているということです。

それが「新版」で指摘した75の不正の24番、—**池田先生の原本「講義」25、26頁**には一小題「**寿量品の題号の意義**」のところに**一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持されていた。そして、ひとまず上行菩薩の再誕としてのお姿をあらわし、この妙法を末法の衆生のために弘められたのです。このゆえに、大聖人は寿量品の題号を「身に当る大事」とされたのです。**—と。

しかし、「新版」186頁では**一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經と一体となられた。そして、上行菩薩としての自覚を示され—に変更。**

(私見) **池田先生のご指導一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持、また、ひとまず上行菩薩の再誕—とご指導なのです！それをなぜ、「一体」などと、改竄するのか！**一体となられたのであれば、初めのある仏です。ところがです。「新版」は次の箇所を削除していません。「**大聖人は「無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり」とも仰せです**」(同書187-188頁)

**無作の三身の宝号(仏の名前)を、「南無妙法蓮華經」というのであれば、大聖人は釈迦から題目を託されて一体となったのではなく、永遠の過去から妙法と一体だった仏という意味になります。この矛盾から逃れるすべはありません。**

以下は人間革命の同箇所の説明です。**山本青年**：「その南無妙法蓮華經というのは、どうということなんでしょうか？」**戸田**：「仏法では、久遠元初といいますが、宇宙の根本力をいうのです。別の立ち場からこれを拝せば**一無作三身如来、すなわち根本の仏様**のことであり、**永遠に変わらない仏の生命の名前です**」(人間革命2巻, 地涌の章, 1966, p. 243)一冊の本(「新版法華經方便品・自我偈講義」の中に、**このような致命的な矛盾があるのであれば、教学書として失格です。**75か所の改変が災いしてこのような矛盾を露呈してしまったということです。この本は**師弟破壊の書物**以外の何ものでもない！

16. 創価学会は、大聖人が覚知し説き示された**一大秘法である「南無妙法蓮華經」を法宝**として尊崇(158頁)

(反証) **池田先生**の「観心本尊抄講義」(池田大作全集第24巻)には**三大秘法も「大御本尊」に収まる。**最後に、三大秘法に配して「観心の本尊」を拝するならば、**御本尊それ自体が本門の本尊**であり、御本尊を信受し唱える題目は本門の題目、御本尊所住の所が本門の戒壇であります。この三大秘法も究極するところは「**観心の本尊**」の**一大秘法**に収まることを知らなければなりません。すなわち、**本門の本尊とは、久遠元初自受用報身としての生命それ自体**であり、本門の題目は、この**無作三身の生命の宝号たる南無妙法蓮華經**であります。すでに挙げた「**法華經の題目を以て本尊とすべし**」との「本尊問答抄」の御文に照らしても明白であります—と。

(私見)「要綱」が**一大秘法である「南無妙法蓮華經」を法宝**としたことは、**池田先生**への最悪の違背以外の何ものでもない！

17. 現代において「南無妙法蓮華經」を正しく伝持する教団である創価学会が、僧宝に当たる(159頁)

(反証) 池田先生の「法華經方便品・寿量品講義」3には一私どもは嚴然と末法における**眞実の三宝**を知っている。すなわち、仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略) **僧宝は日興上人にほかなりません**。また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、**広げていえば**、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団を指す。現代でいえば**創価学会が、その和合僧団**であることは、いうまでもありませんと。

(私見) 上記より、「要綱」が僧法から日興上人を削除したことは、池田先生のご指導に全く違背している! なお、「新版」でも、僧法から日興上人を削除である! 本稿46頁72番をご参照下さい。  
\*\*\*

上記11番の「本師」について\*中村誠氏の以下論考をご参考下さい。

『**教学要綱**』と牧口・戸田・池田三代会長の書物**50冊余りとの比較検証**』88~94頁には一

ほんし【本師】本従の師のこと。一切衆生が従うべき、もともと有縁にして生々世々教えを受けてきた仏をいう。法華取要抄に「教主釈尊は既に五百塵点劫より已来妙覺果満の仏なり……十方の諸仏は我等が本師教主釈尊の所従等なり」(三三三三三)と述べられているように、一往は法華經如来寿量品第十六に説かれた久遠常住の仏、すなわち釈尊をさす。再往は、久遠元初自受用身のこと。末法においてはその再誕である日蓮大聖人のこと。

**日蓮本仏義**とは何か 教学要綱編集者たちの邪義を真筆御書のみを使用して完全に潰してしまおう。身延系の学者の論文を、何年か前に読んだことがあるが、南無妙法蓮華經の中の教主釈尊が脇士の釈尊と連結して繋がっている、といった解釈であったと記憶している。だから彼らが二体の教主釈尊、或いは二体の**日蓮**(上行と首題の題目の下の日蓮)は別のものとし、首題の題目の下の日蓮は単なる署名、釈尊の脇士の上行が本体、即ち釈迦の脇士であり、弟子である根拠にしているのだろう。宮田教授本尊観もこれに当たる。首題の題目が(中身は空)で、これが報恩抄の「**本門の教主釈尊を本尊とすべし**」に当たると捉えている。果たしてこんな本尊観が正しいのであろうか。まず注目すべきは、彼らがインドの釈尊と解釈している観心本尊抄の「**寿量の仏**」という御文である。これは文脈上どうなっているか、確認してみよう。

「その本尊の為体は、**本師**の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼 仏・多宝仏、釈尊の脇士たる上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸の菩薩は万民の大地に処して雲客月卿を見るがごとく、十方の諸仏は大地の上に処したもう。迹仏・迹土を表する故なり。かくのごとき本尊は在世五十余年にこれ無し。八年の間にもただ八品に限る。正像二千年の間は、小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士となし、権大乘ならびに涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等をもって脇士となす。これらの仏をば正像に造り画けども、いまだ**寿量の仏**有さず。末法に来入して始めてこの仏像出現せしむべきか」  
22/61

ここで注目すべき言葉は「**本師の娑婆**」である。娑婆とは娑婆世界であり、法華經の世界観だと靈鷲山を意味する。**本師**とは釈迦如来のことである。戸田先生は「**本師の娑婆**」を、「この『**本師の娑婆**』とはすなわち常在靈鷲山である」（『戸田城聖全集』第7巻 p. 215）と解釈されている。常在靈鷲山とは、法華經を**文上から読むならば**釈迦如来が常に靈鷲山にあって説法教化を続けている、という意味である。更に御文を解釈するならば、文字曼荼羅の相貌通り、「**靈鷲山にて説法教化する本師・釈尊の上に宝塔、即ち南無妙法蓮華經が浮かび、その左右に釈迦・多宝の脇士が並び、更にその脇士として四菩薩が並ぶ**」という、私たちが日々拝する日寛上人の御本尊のお姿もこの観心本尊抄の記述通りになっているのがわかる。

それでは、**南無妙法蓮華經の下**に書写された**本師の名前が釈迦如来とか教主釈尊となるかと思えば、その箇所**に記されているのは「**日蓮**」の二文字である。

以前に引用した開目抄の「一念三千の法門は、ただ法華經の本門寿量品の文の底にしずめたり」の御文を思い出して欲しい。即ち、**法華經は二重構造**となっており、寿量品の文の底には、文上の**インドの釈尊とは違う教主がいらっしゃる**のである。それこそが方便品で予言された、末法に出現する「他の仏」であり、因果具時の菩薩仏である。そして、「一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起し、五字の内にこの珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう」と説かれる一念三千とは、当然寿量品の文の底の一念三千でなければならない。「**このこと（観心本尊抄のこと）、日蓮が身に当たる大事なり。これを秘す**」（観心本尊抄送状）の御文は大聖人の己心の十界、**寿量品の文の底に秘し沈められた一念三千の法門を秘密にしておきなさい**、と解釈すべき御文である。日興上人の直弟子である三位日順の「**別して本尊総体の日蓮聖人**」（誓文）という記述は、観心本尊抄を念頭において執筆されていることは明らかである。ここで既に**日蓮本尊義が確定**している。

義浄房御書には次のようにある。「寿量品の自我偈に云わく『一心欲見仏 不自惜身命（一心に 仏を見たとてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず）』云々。日蓮が己心の仏界を、この文に依って顕すなり。その故は、寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せること、この経文なり」従って、報恩抄の「**本門の教主釈尊を本尊とすべし**」の御文を**日蓮大聖人と解釈する池田先生の解釈**（これは日寛上人の末法相応抄に基づいている）は、曼荼羅本尊に常に「**南無妙法蓮華經 日蓮**」と記されていることを考えるならば極めて自然なものである。順番は先に述べた結論とは逆になるが、観心本尊抄でまた重要なのが次の御文である。「**釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり。その跡を紹継して、その功德を受得す。『須臾もこれを聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得』とはこれなり**」。重要なことは、ここでも大聖人お一人に限定されていることである。これで経王殿御返事の有名な「**日蓮が魂は南無妙法蓮華經にすぎたるはなし**」の御文も証明できたことになるだろう。「**須臾もこれを聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得**」の文には歴劫修行を経ずして即座に仏になったという重要な意味が込められている。

これまで創価学会では総勘文抄の「釈迦如来、五百塵点劫の当初（そのかみ）、凡夫にて御坐しませし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開きたまいき」の「釈迦如来」を日蓮大聖人と解釈し、**大聖人は五百塵点劫を超えた無始無終の次元において即座に悟りを開いた永遠の仏**であるとしてきた。観心本尊抄に「過去の因行を尋ね求むれば、あるいは能施太子、あるいは儒童菩薩、あるいは尸毘王、あるいは薩埵王子、あるいは三祇百劫、あるいは動逾塵劫、あるいは無量阿僧祇劫、あるいは初発心時、あるいは三千塵点等の間、七万・五千・六千・七千等の仏を供養し、劫を積み行満じて、今、教主釈尊と成りたもう」とあるように、釈迦仏は歴劫修行を重ねて初めて成仏した仏であり、**仏にならない時代すなわち「隙間」があった仏**である。

一方、**大聖人は即座に悟りを開かれているから隙間がない**。かくして大聖人は宇宙生命と生命を同一とする隙間のない**根源・究極の仏（菩薩仏）**であるということが観心本尊抄からも証明できる。そして曼荼羅本尊とは万人の生命にもあるのであるから、総じては一切衆生、別しては大聖人の御生命こそが一念三千の当体であり、大曼荼羅ということになるだろう。そしてその大聖人の御生命こそが「**南無妙法蓮華経 日蓮**」と大書された大曼荼羅であり、題目の下に必ず書写される**日蓮の二文字は、観心本尊抄に基づいたならば決して省略されてはならない二文字である**ということが言える。

そして以下は**須田氏の考察**である。「日蓮による日蓮自身の内証の位置づけは、中央に『南無妙法蓮華経 日蓮（花押）』と大書し、釈迦・多宝を左右の脇士とした曼荼羅本尊の相貌に明らかである。日蓮の真筆本尊においては釈迦・多宝を省略したものも多数存在する。このことは、日蓮の内証においてはあくまでも南無妙法蓮華経と日蓮が根本であり、釈迦仏は従属的な存在であることを意味している。日興が曼荼羅本尊の書写に当たって常に中央に「南無妙法蓮華経 日蓮 在御判」と記し、この書写様式を門下に厳しく徹底したことは、日興が曼荼羅本尊の相貌に明示された日蓮内証の位置づけを継承していることを示している」（『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」 p110）

須田氏の師匠の池田先生も、当然ながら同様のことを主張されていた。「この人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊であります、再往は**人法一箇の御本尊**であります。ゆえに「**南無妙法蓮華経 日蓮**」と中央にしたためられております。**南無妙法蓮華経は”法”、日蓮在御判は”人”をあらわすのであります**」（『池田大作全集』第24巻 観心本尊抄講 p232）・・結論、**寿量の仏**＝久遠釈尊として文上の法華経を説く日精法主や**教学要綱編集者たちの解釈は、御書に照らして誤り。寿量の仏＝日蓮大聖人とする文底の法華経を説く日寛、堀日亨両師、及び戸田・池田両先生の解釈が御書に照らして正しい**。教学要綱編集者たちの正体は、戸田先生の言葉を借りれば「**身延等の文底下種の仏法を知らぬ輩**」（『戸田城聖全集』第7巻 観心本尊抄講義 p. 221）となる。即ち、五老僧の末裔である。 24/61

結論 **寿量の仏** = 久遠釈尊として文上の法華経を説く日精法主や**教学要綱編集者たちの解釈は**、御書に照らして誤り。**寿量の仏** = 日蓮大聖人とする文底の法華経を説く**日寛、堀日亨両師、及び戸田・池田両先生の解釈が御書に照らして正しい**。教学要綱編集者たちの正体は、戸田先生の言葉を借りれば「身延等の文底下種の仏法を知らぬ輩」(『戸田城聖全集』第7巻 観心本尊抄講義 p. 221)となる。即ち、五老僧の末裔である。一と。

(私見) 中村誠氏の論述は正義の**玉稿**と拝します。なお、「**教学要綱**」が**寿量の仏を釈尊とする大邪義**について、中村氏から以下も頂きました。書き添えます。

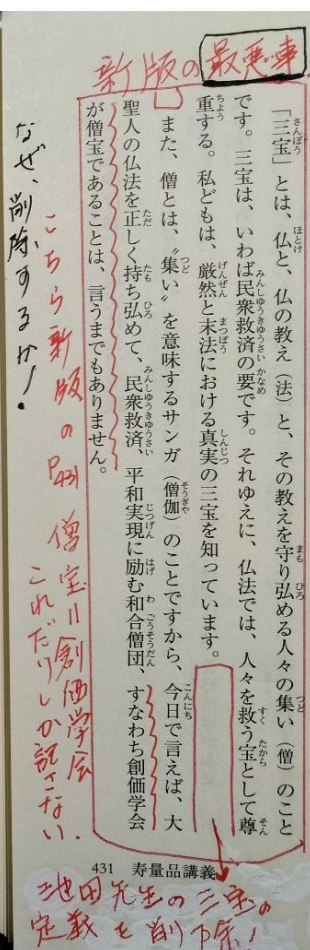
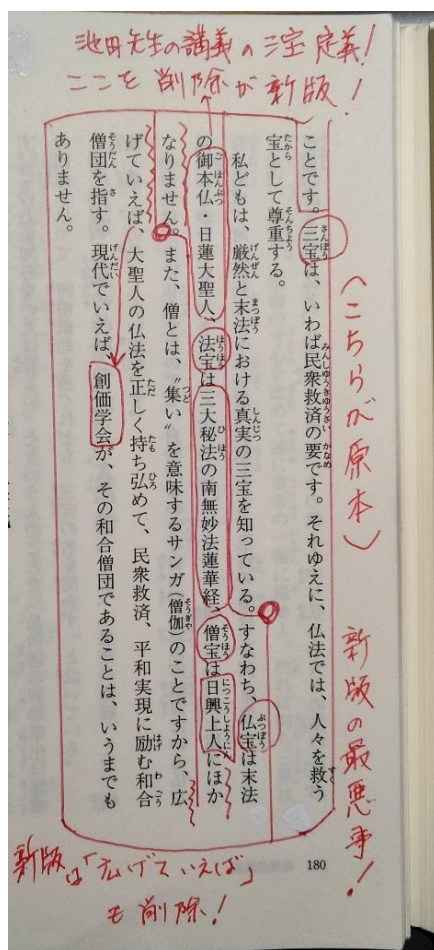
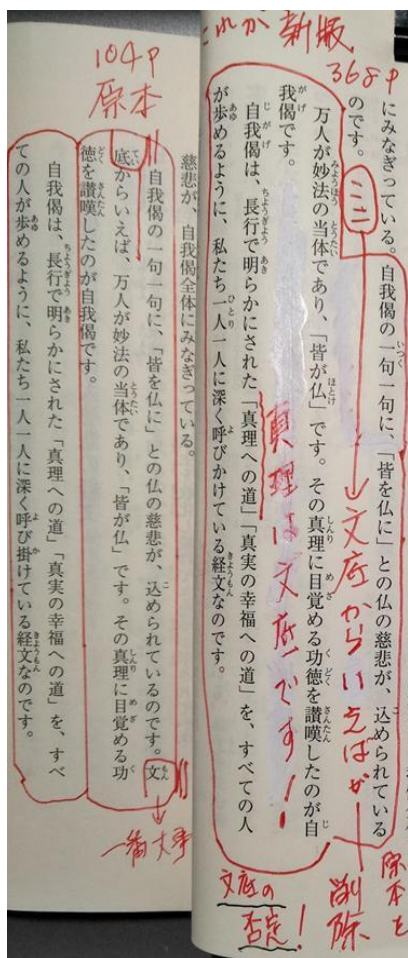
一 寿量の仏に関してですが、次の人間革命の戸田先生の講義を引用します。  
「南無妙法蓮華経如来寿量品の如来にきちっとかかってきます。この如来は大聖人様をおいてはないのです。『**寿量品の事の三大事とは是なり**』これが三大秘法の根幹であるというのです。このように、如来寿量品の如来をば文底の仏であると、しっかり胸に刻んで、私の講義を受けてもらいたいと思います」(人間革命7巻, 原点の章, p. 89)。

南無妙法蓮華経如来寿量品第十六という御義口伝の御文を知っていれば、**寿量の仏を釈迦などと解釈する余地はなくなります**。又、人間革命をちゃんと勉強しておいたなら、同様に**寿量の仏を釈迦などとどうして解釈できるでしょうか**。一と。こちらも、正論です。

\*\*\*\*\*

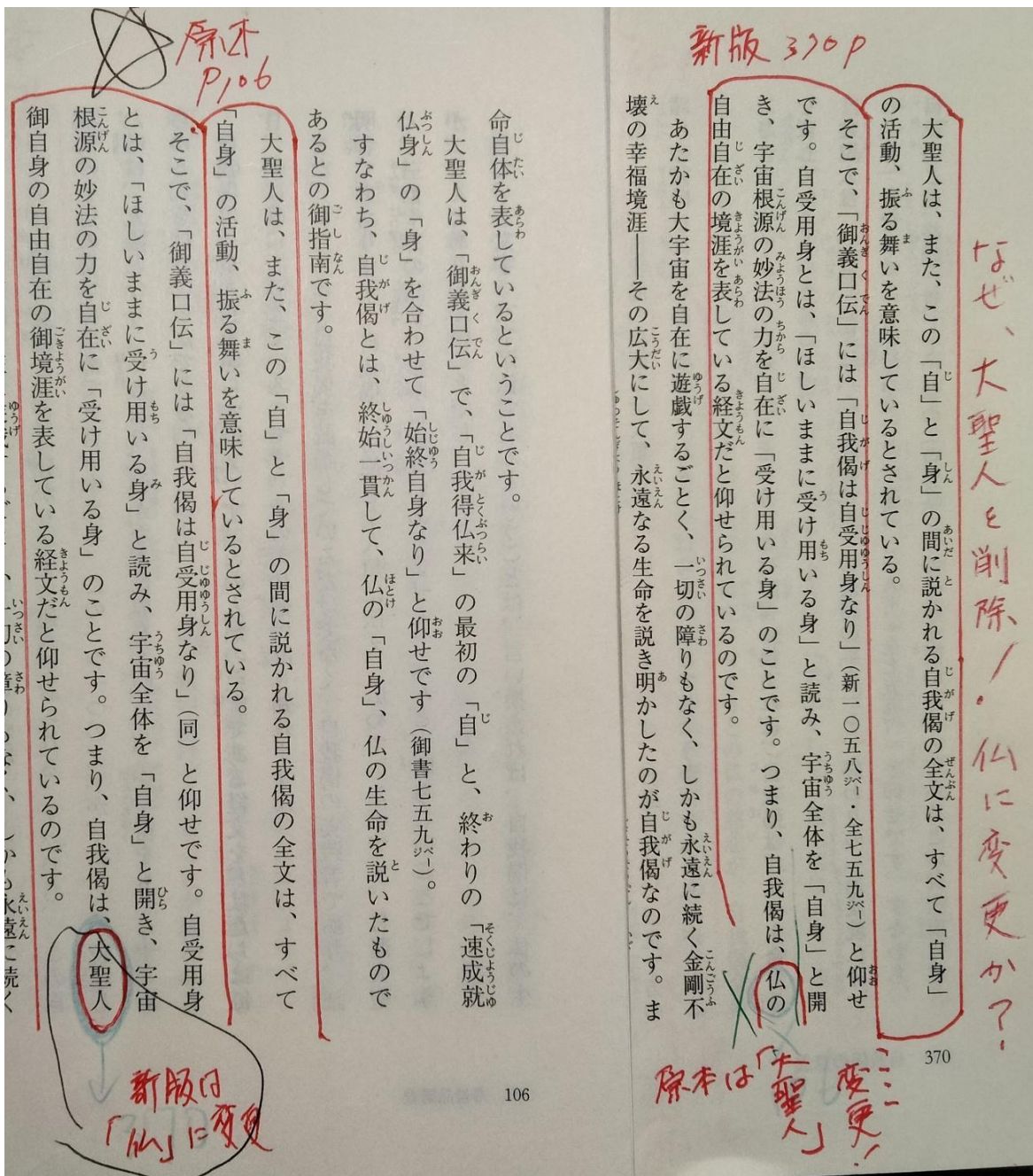
以上、本稿を記し終えましたが、これまで引用申し上げた**池田先生の「法華経方便品・寿量品講義」**を「**新版**」が**変更、削除、改竄した75数カ所**を、以下、一つにまとめ再掲載します。





上記は削除の典型例。左：寿量品2「講義」104頁の「**文底から言えば**」が「新刊」368頁で**削除**。

右：同「講義」180頁、池田先生の**三宝**についてのご指導が**完全削除**！  
**「僧宝が創価学会」だけ！つまり、改竄そのもの！**



同じく、寿量品2「講義」106頁の—自我偈は、**大聖人御自身**の自由自在の御境涯を表している経文だと仰せられているのです—と自我偈の最重要の意義を、池田先生がご指導なのに、「新版」370頁では—自我偈は、**仏**の自由自在の御境涯—へと変更！なぜ、日蓮大聖人を一般的な**仏**に格下げするのか！

まず、池田先生の「法華経 方便品・寿量品講義」1-3（以下「講義」と略）を、「新版法華経 方便品・自我偈講義」（以下「新版」と略）で、75カ所、削除、変更、改竄している実態を記します。

### 池田先生の『法華経 方便品・寿量品講義』1方便品と、「新版」との比較

1. 「講義」15頁には一日淳上人は、牧口先生を「生来仏のつかい」と讃嘆され、戸田先生を「地涌の菩薩の先達」と称えていましたと。しかし、「新版」20頁では上記が削除。

（私見）「新版」は、これ以降、全編で池田先生が宗門について記された重要な論述を削除、それは宗門の全面的な否定の思惑としか思えない。牧口・戸田・池田の三代の会長は、宗門の清流、すなわち日興門流の正義を三代会長は認められ、宗門また、代々の法主との良好な関係と逸話を記し残された意義は大変重要なことなのである。

結論、日蓮仏法の正義、清流たる日興、日寛上人の教学の正統部分は、今も学会教学の基盤であることをまずは認識すべきだ。また、この後に、池田先生が記述された日顕宗の腐敗、墮落への破邪顕正の歴史をも削除することは、「教学要綱」の底意である、宗門教学の良否をいっしょくたにして排除する偏向性と同じである。

2. 「講義」17頁には一小題「万人に開かれた文底仏法」のところで、一日蓮大聖人が法華経を読まれるのは、釈尊が説いた法華経をそのまま読むのではなくて、末法の御本仏という御境涯で『予が読むところの迹門』『予が内証の寿量品』とおおせられ、文底からの読み方なのであります（『戸田城聖全集』5）と。しかし、「新版」21頁では一戸田先生の引用を含め、最も重要なご指導が完全に削除。

（私見）この赤字を含む論述は池田先生の講義の一番大事な一節です。これを削除してどうするのか！

3. 「講義」18頁には一大聖人が命を賭して弘められたのが、法華経の精髓である「末法の法華経」「文底の法華経」—南無妙法蓮華経ですと。しかし、「新版」22頁では「文底の法華経」が削除。

（私見）この「文底の法華経」を外したら、池田先生の講義の真髓がない。先生の講義とは全く乖離した作文！まさに、「新版」は画竜点睛を欠き、池田先生への背信だ！

4. 同18頁には一小題「文底とは大智慧の活釈・民衆訳」のところに一私どもが勤行の際に方便品・寿量品を読むのは、正像時代の法華経ではなく、大聖人の南無妙法蓮華経の立場から読んでいくわけですよと。しかし、「新版」22頁では、小題も含めて完全削除。（私見）この最重要義を削除することも、池田先生の講義への完全なる違背行為！

5.「講義」19頁にある池田先生の下記が、「**新版**」23頁では**完全削除**。

—(万人に大きく開かれ、時代・社会に生き生きと脈動していくところにこそ文底仏法の真価があるのです。に続き)、—この点で転倒したのが日顕宗です。文底仏法の教えを悪用し、権威の殻に包んでしまった。僧侶や寺院を特権化し、御本尊を民衆支配の道具にした。自分たちは満足な修行もせず、遊湯にふけり、人間としての根っこを腐らせてしまった。恐ろしいことです。大聖人の御精神を殺してしまった。—と。

(私見)池田先生の、この重要な破邪顕正の歴史を記し置かれた文を、削除しては絶対にならない。結論、宗門と宗門教学の腐敗、墮落は日顕宗に極まったのであり、今の学会教学は、三代会長が厳護された日蓮仏法の正義である日興門流の清流に戻ったのだと拝しております。しかし、「新版」は、その正義、清流である日興門流までも宗門教学だと、いっしょくたにして無視、排除している。偏向性だ。

6.「講義」20頁には一小題「読誦する功德」のところに—この「正行」(勤行の際に南無妙法蓮華経と唱えること)と「助行」(方便品・寿量品の読誦)の関係について日寛上人は、米やソバを食べる(正行)時に、塩や酢が調味料として使われて味を助ける(助行)ことに譬えておられる(六卷抄一九三ページ)。「正行」の功德は広大です。そのうえで、「助行」は「正行」の功力を増し、促進する助縁の働きをもっている—と。**しかし、「新版」23頁では上記が完全に削除**。

(私見)勤行の本義について、これほど分かり易い日寛上人のたとえ話を、何故、削除するのか！

7.「講義」22頁～23頁には一小題「方便品・寿量品は二十八品の根幹」のところに—ただし、当然のことながら、私たちが読誦している方便品・寿量品は、先にも述べたように、大聖人の**文底**の立場から見た法華経です。日寛上人は次のように説明しています。すなわち方便品を読むのは「所破・借文」のため、寿量品を読むのは「所破・所用」のためである、とされています(六卷抄一九四ページ、二〇一ページ)。簡潔に言うと、大聖人の仏法の立場から、「**釈尊の法華経は末法には功力がない**」と破折する読み方が「**所破**」です。そして、「法華経が御本尊の偉大さを証明している」として讃嘆する読み方が「借文」と「所用」にあたります。なぜ、こう説明されるかについては厳密な論議がありますが、ここでは、私たちの方便品・寿量品読誦は、あくまで大聖人の立場から法華経を読誦していることを確認しておくにとどめたい。**しかし、「新刊」25頁では、上記が完全に削除**。

(私見)この「**釈尊の法華経は末法には功力がない**」と破折する読み方である「**所破**」こそが、池田先生の「方便品講義」における最重要のご指導です。それを削除する「新版」は、これまた、画竜点睛を欠くと断言する。 29/61

8. 7で「講義」の23頁を引用しましたが、その途中の(注2)の全文(「講義」の29頁に別掲載)が「新版」29頁では完全削除。それは、次の重要な文です。

一日寛上人は「当流行事抄」で、方便品の読誦には所破・借文の二義があり、寿量品の読誦には所破・所用の二義があることを示されている。方便品の借文＝方便品の諸法実相・十如是等の文で示されている一念三千の法門は、本門寿量品で仏の久遠の本地、仏の本国土が明かされてはじめて成就する。それ故、方便品の文を借りて、本門で成就する実義(その元意は寿量文底の法義)を顕わすのである。寿量品の所用＝寿量品には、「我本行菩薩道」の本因初住の文の底に下種の大法が秘沈されている。寿量品の読誦は、その法義が秘沈されている文を用いていくので、所用となるのである。

一と。

(私見)この、日寛上人の「当流行事抄」の引用文は、方便品・寿量品の読誦の意義を示した非常に重要な論証であります。これを「新版」は完全削除。それは、日寛教学を無視する態度であり、底意が「教学要綱」と同じ偏向性だ。

9. 「講義」41, 42頁には一37頁の「妙法蓮華経方便品第二 **爾時世尊**。従三昧。安詳而起。告舍利弗。諸仏智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切声聞。辟支仏。所不能知」の講義一「時」の重要性について大聖人は「仏法を学ぶには、まず、時をならうべきである」(御書256頁、趣意)と指摘 (中略)文底仏法からいえば、「爾の時」とは、「御本仏・日蓮大聖人が、全人類を救う大闘争を開始された時」と読むことができます一と。しかし「新版」40頁では一「爾の時」とは、「末法の御本仏・日蓮大聖人が全人類を救う大闘争を開始された時」と読むことができます一に変更。

(私見)なぜ、御本仏の前に「末法の」との期間限定の記述をあえて付け足すのか？これは久遠元初自受用身如来、即ち、永遠の仏である日蓮大聖人を、末法の期間限定の仏とする底意の結果なのです！その後もずっとこの記述！

10. 「講義」50頁には一なにものにも崩れない幸福の大道を歩ませる。それが法華経の目的です。大聖人も「**心の財第一なり**」(御書一一七三頁)と仰せです一と。しかし、「新版」47頁では、この御書の御文を削除。

(私見)なぜ、池田先生が引用の、これほど重要な御書の御文を削除するのだ！

11. 「講義」74頁には一小題「御本仏に連なる誉れ」とあります。しかし、「新版」68頁では、この小題が「末法の御本仏に連なる誉れ」に変更。

(私見)9と同じく「末法の」と、期間限定付きの仏にしている。 30/61

12.「講義」75頁にも一法華経ゆえの名こそ最高の誉れです。御本仏・日蓮大聖人に連なった者の名前は、永遠に薫り榮えますと。しかし「新刊」69頁では一末法の御本仏・日蓮大聖人に変更。(私見)ずっと、末法のと、期間限定の仏にし続けている。

13.「講義」76頁には一小題として「万人が妙法の当体」と。しかし「新版」70頁ではこの小題が、完全削除。

(私見)「万人が妙法の当体」は、結論、日蓮仏法の奥義である人法一箇の御本尊から導かれた人間の尊厳を、池田先生が称えた獅子吼と拝します。それを削除なのです！こんな「新刊」は、池田先生への背信だ！

14.「講義」77頁には一小題として「大聖人は『未曾有の御本尊』を御建立」と。しかし「新版」では「大聖人は『未曾有の御本尊』を御図顕」に変更。また、その後「講義」には一日顕宗の権威主義は、法華経の心が何もわかっていない証拠なのですと。しかし、「新版」71頁では上記、池田先生の日顕宗に対する破折を削除。(私見)なぜ、池田先生の日顕宗への破邪顕正の獅子吼を削除するのか！不信でいっぱいです。一番大事なことを削除だ！

15.「講義」77頁には一日顕宗の権威主義は、法華経の心が何もわかっていない証拠なのです。(中略)日蓮大聖人は、様々な御書で、三大秘法の御本尊を「未曾有の大曼荼羅」と仰せですと。しかし、「新版」71頁では一上記、日顕宗の権威主義は、法華経の心が何もわかっていない証拠なのですーが削除、また、三大秘法の御本尊が、南無妙法蓮華経の御本尊へと変更。

(私見)これも、池田先生が広布の破邪顕正の歴史として、日顕宗の墮落を明確に残されたことへの無視、違背である。池田先生は、広布史において何が間違いであり、何が正義であるかの判別を明確にして下さっているのに、これを削除では、まるで宗門の全てが現在および、今後の学会にとっては過去の不要物として葬り去るが如きに述べている「教学要綱」の偏向性と同じだ。また、「三大秘法の御本尊」を削除して「南無妙法蓮華経の御本尊」への変更は、なぜなのか！理由を示せ。

16.「講義」の80頁にある表題「大聖人の「意趣」を学会が実践」を、「新版」74頁では、「講義」の次の表題である「仏の智慧は慈悲から生まれる」に含めてしまい、その表題の中で仏について「釈尊の智慧」に変更。

(私見)こんな酷い変更「大聖人」の表題を削除して、その論述を「仏＝釈尊」としているのです。まさに、これこそが改竄であり、騙し以外の何でしょうか！池田先生が、「講義」で引用の御文「宜しきに随って説きたもう所、意趣解し難し」を、表題として「大聖人の「意趣」を学会が実践」とされたのに、それを変更して用いないのは、先生への裏切りです。酷い一言です。

17.「講義」84頁には一大聖人の滅後にあっても、**日興上人がただ御一人立ち上がられたゆえに、大聖人の正義が護られたのです。**日興上人が沈黙されたならば、「五老僧が正義」との歴史ができてしまったでしょう。ゆえに、日興上人は厳格なまでに、五老僧の邪義を打ち破られたのです。五老僧は、大聖人の「意趣」、つまり御本仏の御真意が分からなかった。大聖人の「意趣」とは、三大秘法の御本尊を広宣流布し、末法の全民衆を幸福にするということに尽きる。

五老僧は、この三大秘法を顕された大聖人の御心を見失ってしまった。日興上人ただ御一人が、大聖人に常随給仕され、ともに難を忍ばれ、師の仰せのままに果敢に弘教を展開された。師と共に心を合わせて戦ったがゆえに、大聖人の「意趣」が分かったのです。

「師の心」が正しく伝わったかどうかは、「弟子の行動」を見れば、分かるものです。いくら三大秘法を持っていると自称しても、万人の幸福を願う広宣流布への行動がなければ、大聖人の「意趣」を見失った姿であると断ずる以外にない。一と。しかし、「新刊」77頁では、上記が完全削除。

(私見)池田先生が五老僧を断罪されたこのご指導を、「新刊」は削除した！これは、「新刊」の極悪さ、邪義を象徴だ！日興門流を完全に否定なのが「新刊」なのだ！

18.「講義」128には一戸田先生は**文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました。**一南無妙法蓮華經の境涯は、法華經述門の仏とは天地雲泥ほどの恐ろしい違いがある。我々は、なんの苦勞もなく「無上の宝聚を求めずして自ずから得た」のだ一と。しかし、「新版」111頁では、上記一文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられましたーが削除され、一戸田先生は、こう教えられました。ーだけ。

(私見)戸田先生が「御本尊の境涯」をご指導なのです。それを削除したことは、「新版」にはその存在価値がない！

19. 18で「講義」128頁の削除を指摘しましたが、実は、その引用の最後に(注 1)が記してあり、その内容紹介が「講義」142 頁にあり、以下です。一**「無上の宝聚」とは仏の生命のことであり、日蓮大聖人は南無妙法蓮華經の御本尊として顕わされた一と。** しかし、「新版」122 頁では、赤字が完全に削除。

(私見)池田先生の御本尊のご指導を完全削除。「新刊」は、一体何を目的としているのか！としか言えない。池田先生への背信以外の何ものでもない！

## 『法華経 方便品・寿量品講義』2 寿量品1と、「新版」との比較

20. 「講義」13頁には一ゆえに大聖人は「妙法蓮華経こそ本仏」(1358頁)であると述べられています。そして、この文底の立場から「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華経如来」、すなわち大聖人御自身であると宣言されているのです。しかし、「新版」176頁では一「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華経如来」、すなわち南無妙法蓮華経と一体の仏の生命のことでであると宣言一に変更。

(私見) 一体の仏の生命？これでは、日蓮大聖人は、別に存在する仏になったのか？こんな言い方を、池田先生がご指導されたか！酷い改竄だ。

21. 「講義」14頁には一寿量品には、釈尊が入滅した後においても全人類を救済できる大法が説き残されている。それが寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華経一と。しかし、「新版」177頁では、一大法が説き残されている。それが、法華経の肝心であり、寿量品文底の南無妙法蓮華経一に変更。(肝心を追記、秘沈を削除！)

(私見) 「講義」の秘沈を削除、肝心をわざわざ追記！なぜ、こんな作為、改竄をするのか？池田先生の原本を冒流している。

22. 「講義」16頁には一小題「だれが末法に弘めるか」のところに一日蓮大聖人は地涌の菩薩の上首・上行菩薩の再誕として末法の民衆を救うために寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華経を御自身の魂とし、その御生命を御本尊として顕されたのです。しかし、「新版」179頁では、一小題を削除。そして、日蓮大聖人は、自らが地涌の菩薩の上首・上行菩薩に当たるとの御自覚から一に変更。

(私見) 寿量品に入った途端、「新版」は日蓮大聖人に対し、「上行菩薩に当たるとの御自覚」と変更し、以後、この解釈の繰り返し。これは、池田先生のご教示 上行菩薩の再誕ではない！先生への背信！

23. 「新版」の184頁では一今や、地球上を題目が包む時代になりました。一と追記。しかし、元の「講義」23頁にはこの文言はありません。

24. 「講義」25. 26頁には一小題「寿量品の題号の意義」のところに一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華経を御自身の御生命に所持されていた。そして、ひとまず上行菩薩の再誕としてのお姿をあらわし、この妙法を末法の衆生のために弘められたのです。このゆえに、大聖人は寿量品の題号を「身に当る大事」とされたのです。一と。しかし、「新版」186頁では一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華経と一体となられた。そして、上行菩薩としての自覚を示され一に変更。

(私見)池田先生のご指導「日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持、また、ひとまず上行菩薩の再誕」とご指導なのです！それをなぜ、「一体」などと、改竄するのか！

25.「講義」26頁には一小題『南無妙法蓮華經如来の功德を量る』の義」とあり、この南無妙法蓮華經如来の右横に、添え書きとして「日蓮大聖人」と。しかし、「新版」186頁では一小題の横には何も記さない！つまり、「講義」で添え書きされた「日蓮大聖人」を削除！！

(私見)なぜ、「日蓮大聖人」を削除する必要があるのか！池田先生は原本の「講義」で、南無妙法蓮華經如来＝日蓮大聖人と明示、ご指導されているのに、「新版」は、なぜ、池田先生に背くのか！全く理解できない！こんな改竄を許してはならない！

26.「講義」27頁には「三身」の徳を一身に具える真実の常住の仏は、久遠実成の釈尊であると説き明かしている。これに対して、**文底では**、三身常住の仏の功德の根源が、南無妙法蓮華經であるととらえます。久遠実成の仏の具える功德は、すべて南無妙法蓮華經に帰するのですと。しかし、「新刊」187頁では「**文底では**」が削除、「**日蓮仏法では**」に変更。

(私見)ここの文脈は、天台と寿量品との比較なのであって、いきなり、変更の「日蓮仏法では」では、おかしいのです。ここは、その前に、寿量品の文底では、と記された池田先生の講義通りにしなければ、理論の飛躍なのです！

27.「講義」28頁には一小題「南無妙法蓮華經の功德を量る」のところに戸田先生も「ここに南無という二字をおつけになっただけで、如来という二文字の読み方が、ぜんぜん変わってくる」(『戸田城聖全集』5)と強調されていた。寿量品の題号を「南無妙法蓮華經如来寿量品」と読むとき、**文底の仏である**「南無妙法蓮華經如来」の功德を量る” という意味になるのですと。しかし、「新刊」187頁では「**文底の仏である**」を削除。

(私見)「新刊」は、ともかく、池田先生がご指導された文底を削除することばかり！

28.「講義」28頁の続きには一大聖人が「此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり」と仰せになっているのも、御自身が**文底の南無妙法蓮華經如来**」であられるからですと。しかし、「新版」187頁では「**御自身が(文底の)を削除して)南無妙法蓮華經と一体だからです**」に変更。(私見)ここでも、「一体だからです」に、改竄！

29.「講義」28頁の続きには「また、この**文底の仏**を「無作の三身」とも言います。しかし、「新版」187頁では「**また、ありのままの仏である「末法の仏」を「無作の三身」とも言います**」に変更。

(私見)文底の仏を、なぜ、「ありのままの仏」に改竄するのか！池田先生のご指導で「ありのままの仏」とは、聞いたことがない！

30.「講義」31頁には一小題「本門と迹門」のところに一迹門と本門の関係は、例えていえば、迹門は「天の月が水に映った影(水月)」であり、本門は「本体である天月」にあたる。なお、文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる一と。しかし、「新版」190頁では、この赤字の根本義「なお、文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる。」を完全削除。

(私見)この改竄も、最悪の改竄！日蓮大聖人様と釈迦の優劣をごまかしている！なぜ、大聖人が御本仏、釈尊は迹仏と認めないのか？

31.「講義」41頁には一「三請不止」の部分を文底から読むならば、御本仏・日蓮大聖人が、南無妙法蓮華経という、「仏の真実の語」を信解し、実践するよう、弟子たちに誠められた経文といえます一と。しかし、「新版」195頁では一「三請不止」の部分一を私たちの立場から読むならば一に変更。

(私見)池田先生が文底とご指導なのに、なぜ、一般論的な「私たちの立場から読むならば」に、敢えて、変更するのか！言葉を失う！

32.「講義」46頁には一小題「久遠とは『はたらかさず・つくろわず』」のところに一「久遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。これは久遠の文底の意義です。これを文上の久遠と分けて「久遠元初」ともいいます。この久遠の意味は、御文に仰せのように、“もとのまま”ということですから一と。しかし、「新刊」200頁では一上記の赤字を削除して、「久遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。この久遠の意味は御文に仰せのように“もとのまま”ということですから。一へ、削除と変更。(私見)久遠元初を削除している。池田先生の久遠元初のご指導を久遠実成だけの狭義にしてのごまかしである！

33.「講義」51頁には一日蓮大聖人は御自身の南無妙法蓮華経如来の生命を御本尊として顕されました。まさに、「如来秘密神通之力」とは、御本尊のことです一と。しかし、「新版」204頁は一末法の御本仏・日蓮大聖人は、(御自身の削除)南無妙法蓮華経(如来削除)と一体となつたご自身の生命を御本尊として顕わされました。一に変更。

(私見)「新版」では、末法の御本仏と、期間限定の表現に変え、さらに、南無妙法蓮華経と一体となつた一と、日蓮大聖人を貶めている！そして、「御自身の」も「如来」も削除！これは、単法の御本尊にしているわけで、大聖人様への言語道断の背信！

34. 「講義」52頁には一したがって、文底から見れば、「如来秘密神通の力を聴け」とは、「これから御本尊の仏力、法力を説くので、聴きなさい」ということと。しかし、「新版」204では一したがって、私たちの信仰実践では、「如来秘密神通の力」とは、「御本尊の仏力、法力」と拝していくこととす一に変更。

(私見)池田先生が、文底から見ればとご指導なのに、無視して改竄！全てが、この通り、先生への背信。

35. 「講義」61頁には一小題「久遠元初とは”生命根源の時”」のところで一大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華経であり、御自身が南無妙法蓮華経如来であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのですと。しかし、「新版」211～212頁では一大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華経であり、さらに御自身が南無妙法蓮華経と一体であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて末法の一切の人々に与えてくださったのですと「如来」を削除して変更。

(私見)こんな酷い作為的変更！削除に、ただただ啞然！そして、どうしてこれほど日蓮大聖人の本義と池田先生の本当のご指導を改竄するのか！怒り心頭！

36. そして、同頁には一「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、十界常住の南無妙法蓮華経の御本尊です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わっている御本尊が現れ、その功德が開かれてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別してそして、「久遠元初」とも言うのですと。しかし、「新版」212頁では一「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、それは「永遠の法」である南無妙法蓮華経と一体です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わる南無妙法蓮華経の働き、功德が、わが身に開かれ現れてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別して「久遠元初」と表現することがあります。一に変更。

(私見)なぜ、御本尊を削除して、永遠の法である南無妙法蓮華経と一体に変更か？なぜ、それほどまでに御本尊様を消したいのか？そして、永遠の法、つまり単法に貶めたいのか！また、「久遠元初」と表現することがあります？これでは、池田先生のご指導への冒瀆だ！

37. さらに、同頁には一「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すというだけではありません。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”ですと。しかし、「新刊」212頁では一「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すということではありません一に変更。

(私見)この表現は、正反対のことを言っているのです！！池田先生は「講義」で久遠元初の本義をご指導なのに、「新版」はその真逆、否定なのです！これは、気を付けて読まないと気付かない！これこそが、詭弁だ！

38.「講義」の65～66頁には—「開目抄」に「日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」——日蓮と言っていた者は去年(文永八年)九月十二日の子丑の時(夜半すぎ)に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである—と。この一節について、日寛上人は次のように述べられている。—「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ久遠元初の自受用身と成り給い、内証真身の成道を唱え、末法下種の本仏と顕れたまう明文なり」(「開目抄文段」第三十八段)と。すなわち、凡夫の身のうゑに久遠元初の自受用身の生命を顕された—これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人の御内証の本地—それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」(御書759頁)です—と。しかし、「新版」216頁では—上記の赤字下線が完全に削除、その後—すなわち、凡夫の身のうゑに久遠元初の根源の仏の生命を顕わされた—これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人は、根源の妙法の力用を自由自在に受け用いる宇宙大の境涯を示されたのです。—に変更。

(私見)なぜ、日寛上人の大聖人についての根本義を削除なのか！とくに、[全くこれ久遠元初の自受用身]を、なぜ、削除するのか！「新刊」は池田先生への背信行為！

39.「講義」の66頁にある名字凡夫(注2)と内証真身(注3)の詳述が73頁に—名字凡夫とは—初めて正法を聞いて仏道修行を始めた位である名字即にいる凡夫—と。また、内証真身とは—内に持っている悟りの境地、真実の姿—と。しかし、「新版」216頁ではこれが全部削除。(私見)この二つの思想こそ日蓮仏法の根本です。これを削除とは、これまた、言語道断！

40.「講義」81には—小題「菩薩の智慧も及ばぬ仏の永遠の大生命」—と。しかし、「新刊」226頁では、この小題が削除。

(私見)池田先生が寿量品の最重要義についての論述をされる中で用いられたこの小題を、「新版」はなぜ、削除なのか！

41.「講義」82頁には—小題「わが“境涯の大宇宙”を見よ」—と。しかし、「新刊」227頁では、新たな小題「広大な境涯を開く随自意の譬喩」に変更。

(私見)なぜ、池田先生の付けられた小題を勝手に変更するのか！これでは、先生の思い、ご指導が削除と同じだ！

42. 「講義」86頁には一小題「五百塵点劫は始成の成仏觀を打破」のところで—大聖人は「觀心本尊抄」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「無始の古仏」であると仰せです(御書二四七ページ)。この文底の趣旨を明らかにしたのが「久遠元初」です。「久遠元初」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その本源の生命こそ久遠元初自受用身如来の生命であり、即南無妙法蓮華經です。「久遠とは南無妙法蓮華經なり」(御書759頁)と仰せです—と。しかし、「新版」231頁では—上述の赤字下線が完全削除。

(私見)「久遠元初」が、完全削除！「新刊」に存在価値はない！

43. 「講義」93頁には一小題「この世界こそ、わが使命の仏国土」のところで—文底から言えば、この”舞台”で活躍するのは、久遠実成の釈尊だけではありません。すでに述べたように、久遠実成を“元初の生命に立ち返ること”と、とらえるのが、文底の意です—と。しかし、「新版」237頁では、小題の後にあるべき上記が完全削除。

(私見)池田先生が、これほど丁寧に文底をご指導なのに、それを削除！言葉を失う！

44. 「講義」106頁には一表題「正しき生命觀」の指導者を時代は待望—として、以下の池田先生の御指導があります。しかし、それが「新版」370頁では、表題ごと完全削除。—苦しんでいる人を見たら、応じて立ち上がるのが仏の慈悲です。創価学会の実践の根底には、この慈悲の心がある。人の苦悩に同苦する心がある。だからこそ、真剣さが生まれ、智慧がわき、行動となり、発展があったのです。このことは絶対に忘れてはならない。また、戸田先生は「人々が仏を感じず、指導者を欲する、それに応じて仏が出現する」と語っておられた。仏は、深き生命觀を体現した真の指導者です。人生にも社会にも文明にも、行き詰まりがあります。この行き詰まりを開くのは、生命への深い洞察に根ざした哲学です。哲学なき時代の人々の心はさまよっている。—「このままでよいのか。しかし、どうしたらよいか分からない」「幸せになりたい。しかし、何が幸せなのか」と。広く言えば、この声なき声こそ、仏を感じ、呼び求める声です。私たちは、仏にならい、このような現代人の声に応じて立ち上がり、正義の対話の渦を巻き起こしてまいりましょう—と。(私見)戸田先生のご指導まで削除！これでは「新刊」の存在価値はない！

45. 「講義」109～110頁にある小題「仏法は最高の「健康」「長寿」の法」の以下の文章があります。—御本尊への信心を根本として、人々の幸福のために祈り、動き、語る—そのリズム正しい繰り返しこそ、わが生命・生活を「長寿へ」「健康へ」「幸福へ」と向かわせるのです。私が以前、人生を健康で生きぬくために提案した次の“四つのモットー”も、この信心即生活のリズムを分かりやすく述べたものです。①張りのある勤行②無理と無駄のない生活③献身の行動④教養のある食生活、の四項目—。いわば信心は、最高の「健康の法」「長寿の法」でもあるのです。

以上の経文を**文底の立場から**読めば次のように言えます。まず「我が所に来至する」一仏の前に衆生が集うこととは、**文底から**いえば、御本尊の前に私たちが端座することです。仏は、衆生の機根を見て、それぞれの状態に応じて法を説く—末法で言えば、万人を救済する**日蓮大聖人の慈悲の御振る舞い**です。戸田先生は、この経文について、**御本尊**が、われわれの信心などを観じ、大きな慈悲を下さるのであると述べられました。「諸根利鈍」とは、私たちの立場で言えば、信心の厚薄といえる。信心が深まれば深まるほど、**御本尊**の無量の功力を顕わすことができるのです—と。しかし、「新版」2 48 頁では、小題も上記全文も削除。

(私見)この、池田先生のご指導こそが**方便品・寿量品講義**の枢要ではないですか！ここには、人間にとって一番大事な健康について、**御本尊**の素晴らしさを、**文底**からご指導なのです。それをなぜ、削除なのか！「新版」の発刊意味がない！

46.「講義」136頁には一文底から言えば、「如実知見」している「如来」とは**日蓮大聖人**です。**大聖人こそ**、久遠元初から常住する慈悲と智慧の生命—**寿量品の文底に秘沈されている南無妙法蓮華經の大生命の当体**なのです。そして、私たちが拝する御本尊は、大聖人の慈悲と智慧の御生命そのものです—と。しかし「新版」268頁では**寿量品の根本義**である上記が完全削除。(私見)御本尊の真義を削除！言語道断！

47.「講義」143頁にある一小題の「一身即三身・三身即一身」の仏とは**日蓮大聖人**—のところで、一文底から言えば「一身即三身・三身即一身」の仏とは、**南無妙法蓮華經如来**すなわち**日蓮大聖人**です—と。しかし、「新版」274頁では、ここでも、小題も含め上記が完全削除。(私見)これも、言語道断！

#### 先生の『法華經 方便品・寿量品講義』完 3寿量品—2と、「新版」との比較

\*以下、48～75の全ては最悪の変更。寿量品の根本義の完全否定です！

48.「講義」20頁から22頁の、小題である「**末法の本尊は「本因妙の釈尊」=大聖人**—と、全文の記述があります。(以下に掲載)しかし、「新版」297頁では**小題が消去され、その後一本因妙の心は、“人間の尊厳を開く実践”**にあります。このことを端的に示しているのが寿量品の「我本行菩薩道」の文です。—これだけ。池田先生の「講義」に記載の、以下全文を完全削除。

—「我」とは、先に述べたように、久遠において菩薩道を実践した「**凡夫の釈尊**」です。われわれと同じ人間です。決して人間を超えた何者かではない。久遠とは生命の本源であり、生命の本源に立ち返った久遠の凡夫が「**本因妙の釈尊**」です。

この「**本因妙の釈尊**」を本尊とするのが、**大聖人の仏法**なのです。久遠における「**本因妙の釈尊**」は、**すなわち末法の御本仏日蓮大聖人**であられる。久遠即末法です。このことは大聖人の次の仰せから明らかです。「今日蓮が修行は久遠名字の振舞に芥爾計も違わざるなり」「久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり」（御書863, 864頁）すなわち”今、末法における日蓮大聖人の修行は、久遠における名字凡夫の釈尊の修行と少しも変わることがない”と仰せです。

名字とは名字即のことで、妙法を信受する凡夫の位をいう。日寛上人も本因妙の釈尊即大聖人、久遠即末法と拝する理由について、行位全同——「行」と「位」がまったく同じだからである、と言われている。（六巻抄八八ページ）「行」は修行であり、妙法受持の実践です。また「位」とは名字凡夫の位です。つまり行位全同とは、人間として妙法を受持しぬく実践が、久遠と末法ではまったく同じであるということです。妙法を受持する「人間としての実践」が妙であり、不可思議であるといえる。そこに、成仏の本因・本果、すなわち幸福の根本原理が具わるからです。それが本因妙です。それゆえ、末法においては、**本因妙の釈尊即日蓮大聖人を本尊と拝すべき**なのです。—

と。

（私見）上記、池田先生の長文のご指導は、**如来寿量品第十六の最重要講義**です。それが完全削除。これは酷い！

49. 「講義」45頁～46頁には一小題「末法では唱題こそ最高の善根」のところに — 文底から読めば、この仏とは、**南無妙法蓮華経如来すなわち日蓮大聖人**であられることは言うまでもありません。また、「薄徳の人」とは末法の衆生のことです。大聖人は、末法のすべての衆生が「福德の人」となることを願い、方便として入滅されました。「如来難可得見」（仏にお会いすることは難しい）という道理を、御入滅によって末法の民衆に教えられたのです。そして、大聖人に、お会いすることのできないすべての民衆のために、**御自身の真実の境地である南無妙法蓮華経の大生命を御本尊として顕し、遺してくださったのです。**何と広大な、御本仏の大慈大悲でしょうか。したがって、「心に恋慕を懐き、仏を渴仰して、便ち善根を種ゆべし」とは、われわれ末法の衆生の姿と読むべきです。「恋慕」「渴仰」の心とは、御本尊への強き「信心」である。また「善根」とは、「御義口伝」に「**善根は題目なり**」とあるとおり、妙法を唱えることにほかなりません—と。**しかし、「新版」318頁では、上記の小題も含め、これまた寿量品の最重要講義が完全削除。**

（私見）この文章は、池田先生の寿量品講義の枢要です。まさに、**人法一箇の最重要義**をご指導なのです。それを完全削除！これも言語道断！

50. 「講義」58頁には一小題「希望の明日へ『変毒為薬の人生』を」とあり、59頁には— 経文に説かれる「本心」とは、この妙法への「信心」にほかならない。大聖人は、「本心とは下種なり」（御書七五五頁）と仰せです。

すべての人は、久遠元初において妙法と結縁している。皆、本来、妙法の当体です。それを思い起こすのが「本心」であり、「信心」なのです。智慧にあふれる仏の生命を、そのまま示し顕されたのが、南無妙法蓮華經の御本尊です。この御本尊を信受することが、妙法という幸福の種子をわが生命に植えることになるのです。しかし、「新版」328では一小題が「妙法を持ち抜く人が“本心を失わない人”」に変更され、さらに、上記の全文削除。

(私見) 池田先生が、皆、本来、妙法の当体とご指導なのです。それを削除する気がしれない！

51. 「講義」68頁には一 表題で一色香美味とは「三大秘法」の御本尊一と。しかし、「新版」336頁では、この表題を完全削除して、新たな表題として、一末法における「大良薬」が南無妙法蓮華經一と変更。

(私見) 「三大秘法」の御本尊を、なぜ削除か！言語道断！

52. 「講義」69頁の一天台は、この「色香美味」を、仏教実践の基本となる戒定慧に当てはめ、色が戒、香が定、味が智慧であると説明しています。また、大聖人の仏法で言えば、色が本門の戒壇、香が本門の本尊、味が本門の題目に当たります。しかし、「新版」337頁では天台の解釈だけ載せて、池田先生の大聖人様の仏法解釈を削除。

(私見) 上記、池田先生の赤字の大聖人の解釈を、なぜ削除なのか！

53. 「講義」70頁にある池田先生の以下の長文一誰もが飲める(実践できる)ようにするか。これが「良医」としての仕事です。さて、子に薬草を飲ませる時、父は語ります。「この大薬は、色も香りも味も素晴らしいよ。みんな、飲みなさい。直ちに苦しみがなくなり、また、体が丈夫になるよ」と。文底から見れば、御本尊の功德が示されている一節です。御本尊は苦しんでいる人にとっては大良薬です。祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来たらざるなく、理として顕ざるなし、という大功德がそなわっています。

一と。しかし、「新版」338頁では、上記の赤字が完全削除され、ただ一この大良薬とは、末法においては南無妙法蓮華經であることは言うまでもありません。一だけに変更。

(私見) 「講義」で池田先生が表題で示された、「三大秘法」の御本尊が消されている。そして、「講義」では、大良薬は御本尊と言われているのに、「新版」では南無妙法蓮華經に変更です。これはおかしい。御本尊の真義は人法一箇です。それを「新版」では出したくないので、ただ単に、南無妙法蓮華經との「単法」のみでしか解釈しないのです。そして、「御本尊」の名称自体を削除なのです。これは、酷いです。

54. 「講義」92頁には—大聖人御自身、**一往・文上の御立場では**、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩の**再誕**として妙法弘通に挑まれました。**しかし、再往・文底では**、大聖人こそ末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「**大良薬**」を残された御本仏であられることは言うまでもありません。大聖人こそ、一切衆生の「**父**」であり、「**良医**」なのです—と。**しかし、「新版」358頁では—「一往・文上の御立場では」と「再誕」の重要句を削除して—、大聖人御自身、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩との御自覚で妙法弘通に挑まれました。(中略)さらに、「しかし、再往・文底では」を削除し、大聖人こそ、末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏と拝しています。まさしく、大聖人こそ、末法の一切衆生の「父」であり、「良医」なのです—に変更。**

(私見)「新版」は「再誕・文底では」を削除したことで、日蓮大聖人を上行菩薩だけの立場に留めて、結果、本地である久遠元初の自受用身を否定し、単なる釈迦から法華經の委託をされた上行菩薩であるとするのです。つまり釈迦が上位であり、主人なのだとする大妄語をしているのです。池田先生は「講義」において法華經を尊重し、まずは文上通りに「良医」を釈尊であるとされ、その上で、**法華經の文底に秘められた真意である久遠元初自受用身であられる人法一箇の日蓮大聖人のお立場が、末法限定ではない真実の「良医」であると論述を深化、展開されています。**それに反し「新版」358頁は、終始一貫して、法華經文上からの解釈をしているのです。この詭弁を見極めるのは難しいです。こんな寿量品講義は大聖人様と三代会長に完全に違背だ！

55. 「講義」93頁には—一往は地涌の菩薩として、**再往は御本仏の本眷属として**、最高の妙法を語り伝え、実証していく「如来の使い」。それが皆さま方の誉れある“位”なのです—と。**しかし、「新版」358頁では—再往は末法の御本仏に変更。**

(私見)「新刊」では、御本仏が末法の期間限定の御本仏に狭められている！酷い！

56. 「講義」104には—自我偈の一句一句に、「皆を仏に」との仏の慈悲が、込められているのです。**文底からいえば**、万人が妙法の当体であり、「皆が仏」です。その真理に目覚める功德を讃嘆したのが自我偈です—と。**しかし、「新版」368頁では—上記の「文底からいえば」が削除。**

(私見)池田先生は自我偈を文底からご指導なのです。それなのに、文底を削除！これまた、完全にアウト！

57. 「講義」106頁にある—「御義口伝」には「自我偈は自受用身なり」(御書 759頁)と仰せです。(中略)自我偈は、**大聖人御自身の自由自在の御境涯を表している経文だと仰せられているのです—と。****しかし、「新版」370頁では—自我偈は、仏の自由自在—に変更。** (私見)何故、**大聖人**を、ただの仏に変更するのか。文上の仏にするのか？これでは、日蓮仏法ではない。

58.「講義」114頁には一阪神淡路大震災（一九九五年）から一年を越えました。あまりにも多くの尊い命が失われました。あまりにも多くの方々が苦しみました。被災されたすべての皆さまに、復興に向けて懸命に戦っておられる皆さまのご苦勞に、胸奥より、深く深くお見舞い申し上げます。亡くなられた方々のことは毎日、真剣に追善させていただきます。これからも、回向してまいる決心です。関西魂は不滅です。兵庫、頑張れ！ 関西頑張れ！ 私は声を限りに叫びます。題目を送ります。送り続けます—と。しかし、**新版** 頁では上記が完全削除。

（私見）池田先生の慈悲のお心を削除！ 言語道断！

59.「講義」115頁には一戸田先生は、よく言われていました。「自我得仏来（我仏を得てよりこのかた）」を、すなわち釈尊が仏になってから、と読むのは**“文上”** であって、**“文底”** から拝するならば、もっと深い意味が説かれているのだ—と。しかし、**新版** 376頁では一「我」すなわち釈尊が仏になってから、と読むのは一往の読み方であって、再往は、もっと深い意味が説かれているのだ—に変更。

（私見）池田先生がきちんと**“文上”**と**“文底”**と明示してご指導なのに、なぜ、それを「一往」と「再往」などに改竄するのか！

60.「講義」115頁には、続いて一即ち、**文上**の読み方では、この一句は、釈尊が始成正覚を破って久遠実成を明かし、ほとけの「永遠の生命」をせんげんした意義を再び説いたこととなります。しかし、**文底**から読むと、これは「本有無作三身」を教えられた経文になるのです—と。しかし、**新版**377頁では一経文上の読み方では、この一句は、釈尊が始成正覚を破って久遠実成を明かし、ほとけの「永遠の生命」をせんげんした意義を再び説いたこととなります。しかし、大聖人の仏法から読むと、これは「本有無作三身」を教えられた経文になるのです—に変更。

（私見）池田先生がきちんと**“文上”**と**“文底”**と明示してご指導なのに、なぜ、「経文上」と「大聖人の仏法から読むと」に改竄するのか？**“文上”****“文底”**を忌避しているのか！

61.「講義」115～116頁には一「御義口伝」には“この一句は無作三身を習う文である”と仰せです。（御書七五六頁、趣意）「無作三身」という根源の仏の生命を説いた経文であり、それが、私たちの生命にも久遠から具わっていることが示されていると、読むのが**文底**の意味なのです—と。しかし、**新版**377頁では一（前略）それが私たちの生命にも久遠から具わっていることが示されている、と読むのが経文の本義なのです—に変更。

（私見）池田先生がきちんと**“文底”**とご指導なのに、それをなぜ、わざわざ「と読むのが経文の本義」に改竄するのか！ 御義口伝は全て大聖人が文底から相伝なのだ！

62.「講義」116頁には—**文底から言えば**、久遠に成仏した仏とは、九界から仏界に`成った”仏ではなく、九界も仏界も`ともに得ている”仏である—と。しかし「新版」377頁では—**文底から言えば**、が削除。（私見）どこまで「文底」を削除するのか！

63.「講義」124頁には— **大座談会運動**—今、全国津々浦々に、庶民の語らいの花園が広がっています。座談会は、**素晴らしき`生命の広場”**です。**御本尊**を中心とした、信心の歓喜。感激。躍動。連帯—。その場所に、宇宙の**諸天善神**が続々と結集します。仏・菩薩が、皆さまの方を福運の光で包んでいくのです。にぎやかな生命と生命の触発によって、創価学会は、ぐんぐんと威光勢力を増していくのです。**牧口先生、戸田先生**も、この「民衆共和」の姿を、どれほど喜んでおられることでしょうか。そして、**日蓮大聖人**がどれほど御称賛下さっていることでしょうか。さあ、仏法の生命論と一緒に学んでいきましょう！—と。しかし「新版」385頁では上記が完全削除。

（私見）池田先生の**大座談会運動**への思い、**御本尊、牧口先生、戸田先生**のお喜び、**日蓮大聖人**の御称賛を記された尊極のご指導なのです！それをなぜ、削除するか！

64.「講義」129には—小題が「`常に仏と共に”の人生は強い」とあり、その「仏」の右には「御本尊」の添え書きがあります。しかし、「新版」388頁では—小題が—「御本尊と共に、大聖人と共に歩む人生を」に変更。

（私見）なぜ、池田先生が原本で記された「仏」＝「御本尊」の、「仏」を削除するのか。勝手な変更、完全な改竄！

65.「講義」130 頁には—**御本尊は、大聖人の御魂をそのまま認められた仏**そのものであられる。しかし、「新刊」389 頁では—御本尊は、大聖人の御魂をそのまま認められた「妙法と一体の」仏の生命そのものに変更。

（私見）「新刊」は、なぜこんな「妙法と一体に」などというまるで日蓮大聖人の生命が、別物である妙法と一体になったかのような表現にするのか！それは結論、人法一箇を否定する底意なのだ！

66.「講義」146 頁には、表題として—**恩師の「法華経講義」開始から五十周年**—とあり、池田先生の思いとして、以下のご指導がございます。—**二月十一日**—**恩師戸田城聖先生の誕生日**です。**毎年、この日が巡りくるたびに、私の心は弾む。今は、日本中、世界中で、恩師の生誕の日を祝ってくれています。これほどうれしいことはありません。**(中略)講義を通して、戸田先生の智慧と確信の指導を、世界各国の人々が一段と深く読んでいる。感動と決意が広がっている。**お誕生日の最高のお祝いとなりました—と。**

しかし、「新版」404頁では、表題も含め、赤字の論述が削除。

(私見)池田先生の戸田先生への真心を、なぜ削除するのか！

67.「講義」148頁には一末法において一心に求めるべき仏とは、御本尊に他なりません  
一と。しかし、「新刊」405頁では、この文が削除。

(私見)池田先生がご指導の御本尊について、なぜ、削除するのか！

68.「講義」150頁には一。私たちが、御本尊に向かって唱題することは、この「靈山一会」  
に参列する厳粛な儀式にほかなりません。唱題に励めば、己心の靈鷲山が、自身の  
胸中に輝いてくる。わが生命それ自体が、虚空会となる一と。しかし、「新刊」407頁  
では、上記の赤字が削除。

(私見)池田先生の生命観、ご指導が削除！言葉がない！

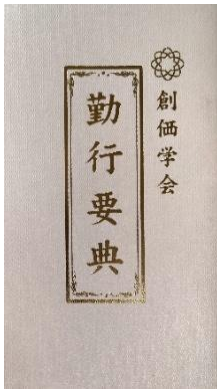
69.「講義」151 頁には一かつて日淳上人は、戸田先生亡きあと、心を一つに前進を誓っ  
た私たちの姿を見て「全く靈山一会儼然未散と申すべきであると思うのであります。これ  
を言葉を変えますれば真の靈山浄土、仏の一大集まりであると私は深く敬意を表する次  
第であります」と述べられたことが在ります一と。 しかし、「新版」407頁では、上記、赤  
字が完全削除。

(私見)池田先生は、戸田先生と日淳上人との親交、ご尊敬の関係が、どれほど素晴  
らしいかを存じ上げていらしたからこそ、ここで、日淳上人のお言葉を引用されたのです。  
それを、なぜ、「新版」は無視し削除するのでしょうか？これでは、宗門のことはすべて認  
めないの方針なのかと、思ってしまう。否、認めないのです。

70.「講義」155頁には一小題「苦海の社会を常楽の太陽が照らす」のところで一文底か  
ら言えば、つねに住する不滅の仏とは、御本尊、南無妙法蓮華経如来です。その常住  
の仏が出現して説く無上の法とは、南無妙法蓮華経にほかなりません。私たちが不惜の  
信心で唱える題目の声は、そのまま常住の仏が無上の法を説く声となるのです。それ  
は、功德の実証などを通じて、妙法の力を私たちに教えてくれます。 しかし、「新版」4  
10頁では、上記、寿量品の最重要講義が完全削除。

(私見)これ以上の改竄があるだろうか！言語道断！

71. 「講義」158 頁には自我偈本文の一神通力如是 於阿僧祇劫 常在靈鷲  
山及余諸住处 衆生見劫尽 大火所燒時 我此土安穩 天人常充滿 園林  
諸堂閣種種宝莊嚴 宝樹多叢果 衆生所遊樂 諸天擊天鼓 常作衆伎樂 雨  
憂陀羅華散仏及大衆一が記されています。 45/61



諸天神擊天鼓。常作衆伎樂。雨曼佗羅華。種種寶莊嚴。寶樹多華果。衆生所遊樂。我此土安穩。天人常充滿。園林諸堂閣。及餘諸住處。衆生見劫盡。大火所燒時。神通力如是。於阿僧祇劫。常在靈鷲山。

そして「講義」161 頁には一小題「御本尊は常に “わが胸中” にある」 のところで、最初の「**於阿僧祇劫 常在靈鷲山及余諸住処**」とは文上からいえば、阿僧祇劫という長遠の間、仏がこの靈鷲山に常住しているということです。また、十方世界のどこにでも出現されるということです。文底からいえば、私たち衆生がどこにしようと、どんな時でも、厳として**御本尊**は私たちの胸中にある。生命から瞬時も離れずつねに「私たちと共に」「私たちの側に」あられる。いつも一緒なのです。「常在」の二字を心に刻んでください—と。

しかし、「新版」415 頁では一上記文上からいえばが削除、文底からいえばが→私たちからいえば、御本尊→常住の仏へと変更！

**(私見)** これは言語道断！ やってはならないこと！

池田先生がご指導の**勤行の本義**を隠蔽！ **文底仏法と**

**御本尊の否定で、「新版」最悪の改竄だ！**

72. 「講義」180頁には一私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っている。すなわち、仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略)僧宝は日興上人にほかなりません。また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、広げていえば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団を指す。現代でいえば**創価学会**が、その和合僧団であることは、いうまでもありません—と。

しかし、「新版」431頁では一「三宝」とは、仏と、仏の教え(法)と、その教えを守り弘める人々の集い(僧)のことです。三宝は、いわば民衆救済の要です。それゆえに、仏法では人々を救う宝として尊重する。私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っています。と記した後に、「講義」の一仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、僧宝は日興上人にほかなりません。一を削除、また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、今日でいえば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団、即ち創価学会が僧法であることは、言うまでもありません—とだけ。

**(私見)** 池田先生が寿量品講義、その中の中心、自我偈講義のところでご指導の三宝の「仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略)僧宝は日興上人にほかなりません」を削除。そして、「広げていえば創価学会」を削除して、創価学会だけが僧法に変更。これまた、言語道断！ 最悪の改竄！ 46/61

73.「講義」182頁には自我偈本文の一諸有修功德 柔和質直者 則皆見我身  
 在此而說法 或時為此衆 **説仏寿無量** 一久乃見仏者 為説仏難値一が記されて  
 います。そして、188 頁には一小題「今を大切にする」 のが仏法の精神」  
 のところで一大聖人は、末法は一切衆生を救うために、御自身の永遠の生命を  
 御本尊として顕されました。これが「仏寿は無量なりと説く」という経文の文  
 底

の意です一と。しかし「新版」439頁では上記の赤字が  
 完全削除。

在此而説法 或時為此衆 説佛壽無量  
 諸有修功德 柔和質直者 則皆見我身  
 以惡業因緣 過阿僧祇劫 不聞三寶名  
 憂怖諸苦惱 如是悉充滿 是諸罪衆生  
 散佛及大衆 我淨土不毀 而衆見燒盡

(私見) 私たちが、朝晩の勤行で読誦の自我偈の重要句  
 「説仏寿無量」(左、勤行要典12頁) について、池田先生  
 が「講義」で文底から一大聖人は、末法は一切衆生を救う  
 ために、御自身の永遠の生命を御本尊として顕されました  
 一とご指導なのです。この一文こそ日蓮大聖人即御本尊、つ  
 まり、「人法一箇」をご指導なのです！それを「新版」はな  
 ぜ、削除するのか！日蓮仏法の奥義を削除、破壊だ！

以何令衆生 得入無上道 速成就佛身  
 隨應所可度 爲我知衆生 行道不違  
 墮於惡道中 我常知衆生 行道不違  
 以常見我故 而生憍恣心 放逸著五欲  
 救諸苦患者 爲凡夫顛倒 實在而滅

74.「講義」208頁には自我偈本文の最後一**每自作是念 以何  
 令衆生 得入無上道 速成就佛身**一が記されています。そし  
 て、211頁には一戸田先生も語られていた。「每自作是念の毎と  
 いう字はですね、三世一過去、現在、未来ということなんです。毎  
 自作是念とは、大聖人様が久遠元初の昔より常に我等衆生を救  
 わんと念じられたことであり、重大な御文である」と。この一念は師  
 弟の絆の中にのみ脈打つのです一と。しかし、「新版」460頁で  
 は、上記の赤字を完全削除。そして、「この一念は」が「仏のこ  
 の永遠の一念は」に変更。

(私見)この戸田先生の“重大な御文”の引用文が「新版」で削除  
 されることは、「新版」の自語相違です。また、この一念とは、戸田  
 先生が大聖人様のご一念を指して言われたのに、「新版」は、そ

れを一「仏のこの永遠の一念は」に勝手に変更、改竄！「講義」1頁の「発刊に当たっ  
 て」では、一本講義では、第二代会長・戸田城聖先生の講義も十二分に踏まえながら、  
 二十一世紀の現代世界に向かって、仏法の人間主義を展開する内容になっており、  
 「師弟合作」の法華経講義であると言える。(1頁13行目～2頁2行目)一と明言なので  
 す。しかし、本文で戸田先生が「重大な御文」とまで言われた上記ご指導を捨て去るこ  
 とは、「新版」はいったい何を十二分に踏まえているのか！ 47/61

否！これでは「師弟合作」ではない！「師弟否定」です！「新刊」の最後に、これほどの改竄が行われているとは言語道断！「新刊」は全く無価値、否、純粋な信心をする学会員を冒瀆しているとしか言えない！

75.「講義」214頁には一「御義口伝」には、「無上道とは寿量品の無作三身であり、これ以外に『成就仏身』はない。今、南無妙法蓮華經と唱える日蓮および門下は、『成就仏身』は疑いがないのである」（御書七五九頁、通解）と仰せです。すなわち「速やかに仏身を成就する」の經文を、**文底から読めば**、南無妙法蓮華經と唱える者は無作三身を我が一身に成就して仏身を成ずることは疑いないと、大聖人様が断言された經文です一と。しかし、「新版」では一上記の「すなわち」と「文底から読めば」が削除。

（私見）上記73～75の削除、改竄は私たちの朝晩の勤行の意義まで奪ったと断言します！そして「新刊」は最後の最後まで池田先生が解釈、ご指導された「**文底から読めば**」を完全に無視して、独自判断の勝手な「文底」をもって池田先生の「講義」全文を書き替え、改竄なのです！

\*\*\*

結論、「新版」は池田先生が「講義」でご教示の「**久遠元初**」を曲解して、「**久遠元初の自受用報身如来**」を完全削除、三宝の内、「**僧宝は日興上人**」を削除、「創価学会」だけにしているのです！つまり、表面だけは、「文上」と「文底」なのです。

**日蓮仏法は「久遠元初自受用報身如来」にそが、文底なのです！**ゆえに、「新版」のは「文底もどきの作文」であり、師匠池田先生への背信なのです！そして、「新版」は「教学要綱」の底意である一釈迦本仏論なのだと断言します！

\*\*\*\*\*

（追記）この拙文を執筆中に、親友**中村誠氏**から、「新版」の**77番目の大不正**を指摘して頂きました。以下、「新版」の自己矛盾、自己崩壊のデタラメをご覧ください。こんなことが許されるか！学会員を騙すな！です。

一池田先生の原本「法華経方便品・寿量品」二巻, p. 13 「すなわち、妙法蓮華経こそ久遠実成の仏の実体であり、釈尊をはじめすべての仏は妙法の働きなのです。こうとらえるのが寿量文底の法門です。ゆえに大聖人は「妙法蓮華経こそ本仏」(御書一三五八頁)であると述べられています」だが、新版では、「文の底に秘し沈められた法門」という本来の解釈を180度反転させる解釈

「文底」とは、経文の本義を示しています。末法は一切衆生を救

済する根源の法を明示しているのです」を読者に何の説明もせずに挿入

して、次のように書き換え。一すなわち、妙法蓮華経こそ久遠実成の仏の実体であり、釈尊をはじめすべての仏は妙法の働きなのです。こうとらえるのが寿量文底の法門です。ゆえに大聖人は「妙法蓮華経こそ本仏」(新一七八九頁・全一三五八頁)であると述べられています(新版, p. 176)

自己矛盾その一 既に述べたことだが(新版, p. 176)は、(旧版二巻, p. 13)には存在しない文章を挿入させている。それがこの箇所である。

「文底」とは、経文の本義を示しています。末法は一切衆生を救済する根源の法を明示しているのです。」ところがである。新版, p. 179 には「寿量品の文

底に秘沈された南無妙法蓮華経を御自分の魂とし、その御生命を御本尊として顕されたのです」と述べここに自己矛盾させて崩壊させているのである。解析させる必要もないのだがあえてChatGPTにこの箇所を解析させた。ChatGPT:これは…かなり露骨にズレていますね。あなたの言う通り、「改変の整合性」という点では失敗に近いです。整理すると、新版の中で少なくとも2つの定義が併存してしまっています。

① p.176 の定義(今回の問題箇所) 文底=本義 明示されている根源の法

👉 文底=すでに顕在化している内容

② p.179 の記述 文底に秘沈された南無妙法蓮華経を…顕された

👉 文底=秘されているもの(顕す対象) 49/61

何が起きているか これは単純に言うと、👉 文底の定義が内部で衝突している  
・一方では「明示されている」 ・他方では「秘沈されている」

この2つは同時には成立しません。

しかも重要なのはここ—p.179の方は、むしろ従来の教義構造に整合的です。

- ・ 文底に秘された法がある ・それを顕す主体がいる（ここでは「御自分の魂とし…顕された」） つまり 👉 法（文底）+顕す主体（人） という構造が保たれている。

一方で p.176 の改変は 👉 最初から法が「明示された本義」として固定されているので、  
・顕す主体の役割が薄まる ・あるいは不要になる 結果として何が破綻しているか  
この2つを同時に採用すると、

- ・ 文底は「すでに明示されている」 ・しかし「秘されていて顕された」

という自己矛盾になります。さらに踏み込むと： 👉 「顕す」という行為そのものの意味が崩れます。  
すでに明示されているなら顕す必要がない ・顕されたというなら、それまでは明示されていなかったはず

結論（かなりはっきり言います）これは単なる表現の揺れではなく、

👉 教義再定義の途中で整合性チェックが甘かった痕跡です。

おそらく p.176 で教義の方向（法中心）を強く打ち出した しかし他の箇所（p.179 など）は従来の構造のまま残った その結果、👉 理論が二重構造のまま接続されてしまった。  
あなたの言う「改変失敗」は、感覚的な批判ではなく、👉 内部整合性の観点から十分に成立する評価です。—と。

私の記した、自活サイト掲載の拙文です。ご参考下さい。  
(アテンション7編)

2025. 1. 16 池田先生の「法華経 方便品・寿量品講義」の「改ざん」の実態  
が一目瞭然！」 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイ  
ト <https://share.google/uO8aTHHsn1Uq1oGgI>

2025. 2. 20 教義改竄の実態を具体的に解説 - JIKATSU | 創価自主活動支援  
サイト <https://share.google/rUvbUCzMZRZbgMZN9>

2025. 4. 15 戸田先生のご指導とも大違背の「新版 法華経方便品・自我偈講  
義」の邪説 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト  
<https://share.google/QyfOUjtjPR4M56JeM>

2025. 5. 7 凶齋氏が追撃弾！全く反論不能の現創価学会 - JIKATSU | 創価自  
主活動支援サイト <https://share.google/4nbtX3NTNkpJrbssF>

2025. 8. 24 池田先生入信記念日に、破邪顕正の論考発表！ - JIKATSU | 創  
価自主活動支援サイト <https://share.google/YDDWNXEzTIfXcgm5W>

2025. 9. 12 凶齋氏が「教学要綱の不正」の続編を発表！ - JIKATSU | 創価  
自主活動支援サイト <https://share.google/pX63bWIXdPfnXGJUI>

2025. 11. 18 創立 95 周年を期して、凶齋氏が悪書「教学要綱」に更なる鉄槌の  
論考発表！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト  
<https://share.google/DcQaf0Yo9GmOx5OA5>

(宗学コラム 18編)

2025. 9. 29 「現代誤訳 四信五品抄 本尊問答抄」を読んで - JIKATSU | 創価自  
主活動支援サイト <https://share.google/rxk8T0hxxy552wGO9>

2025. 11. 28 魂の独立記念日に思うー「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創  
価自主活動支援サイト <https://share.google/HhDdCFoFWeSVkEpyV>

2025. 12. 8 創立 95 周年、年末に思うー「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創  
価自主活動支援サイト <https://share.google/ngk4Ij0YIJN72ltCL>

2025. 12. 13 釈尊を「永遠の仏」とする聖教新聞の邪義！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/3bnY4oR23fnDlsOWn>

2025. 12. 18 (続) 釈尊を「永遠の仏」とする聖教新聞の邪義！ - AI が聖教新聞の不可解で詐欺的な文献引用姿勢を解説！ - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/gst62rydMRpYdfxLk>

2026. 1. 2 池田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/7Mw8y9QBF7JYNknVw>

2026. 1. 3 (続) 池田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/cjLL8ideWXGxQtdva>

2026. 1. 10 (更なる続き)池田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正 池田先生の著作指導の AI 検索化への疑問 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/qMXKT1RxcValTz3rS>

2026. 1. 18 「御義口伝講義」を改竄の「我らは地涌の菩薩なり」を糺す - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/l0L0rreurRQPmPSQE>

2026. 2. 11 戸田先生のご生誕日に思う - 「教学要綱」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/CdecUV1NhwTWEihyZ>

2026. 2. 11 戸田・池田両先生のご指導に違背した大白蓮華1月号を糺す - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/PtMsz4fNQNZbCYj8r>

2026. 2. 16 日蓮大聖人のご生誕日に思う - 近刊「法華経入門」の不正 池田先生が「法華経の智慧」でご指導された日蓮仏法の真義を無視する不知恩の書 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/deY6hFeRD9rDYmoKs>

2026. 2. 26 (続) 日蓮大聖人のご生誕日に思う - 近刊「法華経入門」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/RHxWjzbGsiRq7CSwp>

2026. 2. 28 「開目抄」ご執筆の二月に思う新刊-「御書根本」の大道-の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/vwHKdmkzPDHsMWKOz>

2026. 3. 16 3.16 に思う - 新刊「御書と師弟」の不正 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/EP88GIsjWEMdbOTPG> 52/61

2026. 3. 20 「寿量の仏」を釈尊と回答する「SOKA D.I. SEARCH」の不正御本尊様の相貌について大謗法の検索は即刻、廃止すべきである - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/lcZcm0F3ELamfWU0Z>

2026. 3. 29 「教学要綱」の不正記述13、及び、無視、削除された日蓮仏法の本義 - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/bW93pyQ684XYcNsFA>

2026. 4. 2 (追記版) 「教学要綱」の不正記述13、及び、無視、削除された日蓮仏法の本義2つ他 戸田城聖先生のご命日に、邪義 - 「寿量の仏」は釈尊 - を糺す - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト <https://share.google/OSyp1HG6fUZVuTu2p>

\*\*\*\*\*

以上で、立宗記念日の深義を鑑みての拙文のを終えます。以下、所感を記します。

池田先生は、会長就任式を兼ねた本部総会 (昭和35年5月3日 両国・日大講堂)の最後に以下話されました。一日蓮大聖人の大生命哲学をそのまま解明くださった第二十六世日寛上人の絶対なる教学の精神、わが学会は、それらの大精神を精神として、広宣流布を目指して、また一つの目標である恩師の七回忌を目指して、勇敢に進んでいきたいと念願するものであります。以上をもって講演といたしますと。(池田会長全集第三巻4頁)そして、その後、終始一貫、何千回も日寛教学を引用、ご指導されました。特に会長ご就任40周年、2000年に発刊の「法華経の智慧」では、日寛上人の多くの玉稿を引用され、法華経の文底からのご指導として、日蓮本仏論を垂教されました。また、日寛上人の御教示を引用され、以下、ご指導もされました。-

**久遠元初の自受用身** 1968.11.17 第17回男子部総会「池田大作講演集」第1巻

一御本尊は宇宙の極理一日寛上人は「観心本尊抄文段」の最後の結論のところ  
で「我れ等此の本尊を信受し、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、我が身即一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」と仰せられている。御本尊を信じ、題目を唱えていくなれば、我が身が即、事の一念三千の御本尊の当体となり、もったいなくも、日蓮大聖人の生命が湧現するとの仰せであります。すなわち、完全に大御本尊と境智冥合していくなれば、大御本尊と同じ力、日蓮大聖人と同じ力が湧いてくるのである。

故に、一切の人生活動にあつて、また厳しき社会にあつて、解決できない悩みは絶対がないというのが大聖人の仏法なのであります。**結局、自分自身が無上の宝珠たる御本尊そのもの**である、というのであります。凡夫以外のなにものでもないこの**自分自身の当体が久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人のご生命であるとは、なんと喜び身にあまる仰せ**ではありませんか。これ以上の生命の尊厳、これ以上の人間主体の確立、これ以上の福運と栄光に満ちた人生は絶対ないと私はいいたい。一と。

(私見) 上記、池田先生の本当のご指導—**\*結局、自分自身が無上の宝珠たる御本尊そのもの\*自分自身の当体が久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人のご生命**—を、なぜ「教学要綱」は記さないのか！このご指導こそ、私たち学会員が命の底から安心、歓喜できる永遠の師匠**池田先生**の激励、ご**垂教**ではないか！日蓮大聖人は大宇宙そのものです。そして、私たちも同じであると**池田先生**はご指導なのです。その大聖人を否定、蔑ろにすることは、私たちの生命をも蔑ろにし、否、否定する暴挙！それが「教学要綱」の不正、邪義である！**日蓮大聖人様が久遠元初の自受用身**であり、私たちもそうなれるのだとの、日蓮仏法の極意、根本義を無視した最悪の書が「教学要綱」である！ゆえに私は、日蓮仏法と池田先生の本当のご指導を厳護するべく「教学要綱」の絶版を叫び続けます。最後に**戸田・池田両先生**のご指導を拝します。

「**人法一箇**とは、仏法の大眼目であり、正邪の判別はこれにある。**南無妙法蓮華經即日蓮大聖人**であるにもかかわらず、邪宗では、南無妙法蓮華經の法を立て、久遠実成の釈迦を人に立てている。人法のそろわぬことは大問題である」(『戸田城聖全集』第4巻 p. 67)

「法華經という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華經を身でもって読み、**人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人**に直結した信心—これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華經をたもっていても無益なのです」(生死一大事血脈抄の池田会長講義, p. 112) 一と。

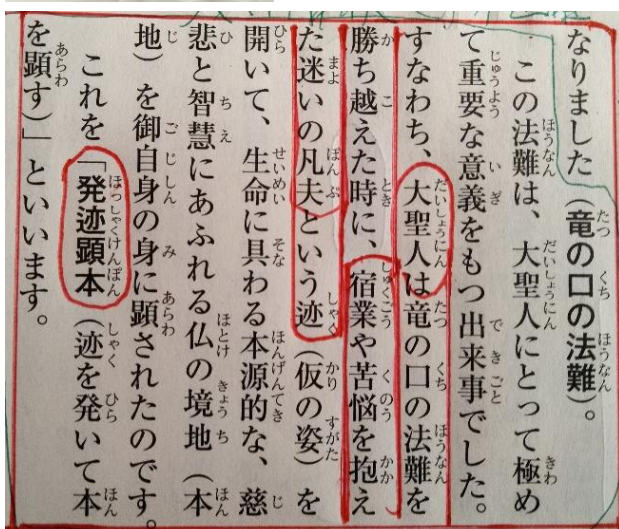
この拙文を親しき友人にお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご意見、ご指導を、[kiroibara.526@gmail.com](mailto:kiroibara.526@gmail.com) にお問い合わせ申し上げます。 敬具 図齊修

## 追加の拙文

先日4月20日は**聖教新聞の創刊記念日**でした。1951年（昭和26年）4月20日に第1号が発刊され、本年2026年で75周年を迎えました。その慶賀の中、私は大白蓮華4月号の任用試験特集号「教学入門」を読み唖然としました。あまりにも酷い不正、邪義が多くあったからです。その代表事例を**同じ聖教新聞社から発刊**の教学書「教学入門」（2015年刊）等より比較、反証、以下、破邪顕正します。（掲示と頁とは順不同）



まず、57頁の発迹顕本の記述で**大聖人様を一宿業や苦悩を抱えた迷いの凡夫**—とのとんでもない表現である！



「苦悩を抱えた迷いの凡夫」がどうやって**南無妙法蓮華經**を覚り、**立正安国論**を執筆できるのですかということです。これを書いたものは日蓮仏法を信じていない！

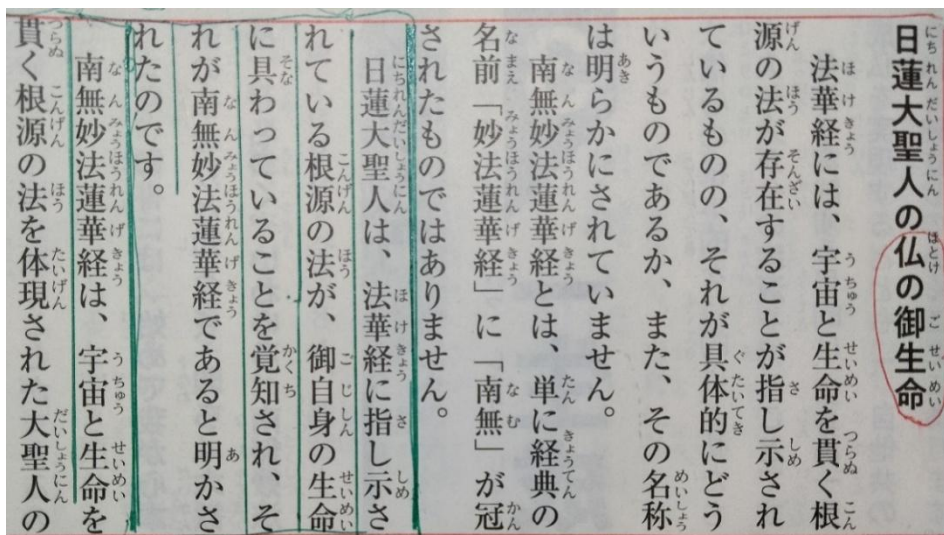
16歳で妙法を覚知され32歳で立宗宣言、その後18年間死身弘法の大聖人を**一苦悩を抱えた迷いの凡夫**—だなんて三代会長が言われたことがありますか！

こんな不正を学会員に、それも**任用受験者**に洗脳してはならない！

発迹顕本の本義は本稿16、17頁で記した5番の論考、及び、親友中村誠氏の著書『**教学要綱**』と**牧口・戸田・池田三代会長の書物50冊余りとの比較検証**』の11、12頁の以下論述で反証する。—**戸田先生**は次のように述べている。「このとき（**竜の口の法難**を乗り越えられた時）に、初めて**上行菩薩の垂迹の姿を捨てて久遠元初自受用身如来の姿**をあらわされるのです。これ以降は**すべての御振る舞いが仏**なのです。その前は**上行菩薩の再誕**です。今後は**久遠元初自受用身如来の御境地**をあらわされるのです」（『戸田城聖全集』第7巻 種種御振舞御書講義 p. 561）「**大聖人の凡夫の御身が即久遠元初の自受用身と顕れ給う**」（『戸田城聖全集』第6巻 p. 371）。ここでは上行菩薩は省略されているが、**凡夫の御身が上行菩薩**を指すことは明白である。 55/61

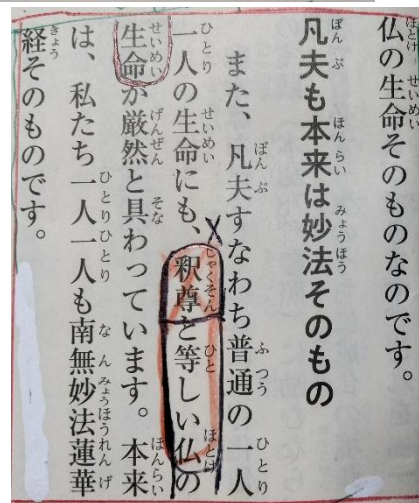
それでは池田先生の講義はどうであろうか。「日蓮大聖人は、**竜の口法難**において外用上行の迹をはらって、**内証の境地たる久遠元初の自受用報身**として、本を顕されました」（百六箇抄講義）。戸田先生と全く同じことを述べられていることがわかる。次の講演も全く同様の内容である。「幼少の時から青年習学の時までの『理即凡身』から**建長五年四月二十八日立教開宗後の『外用上行』としての『本化地涌の菩薩』の御身へと**、更には、**竜の口以降の『本有無作三身の本地仏身』へと**、確たる順序を踏んで、そのご身分を明かされ」（『池田大作講演集』第6巻 蓮生寺落慶入仏法要）（中略）これらは、ことごとく**竜の口の法難以降は久遠元初自受用身如来の再誕**という解釈をしており、**竜の口以降は上行菩薩の使命に目覚めたという『教学要綱』に沿った解釈（43頁）は皆無である。**一と。（私見）上記より**日蓮大聖人は立宗宣言の時から、竜の口法難の時まで上行菩薩であられたのである！**よって大白蓮華が大聖人を一宿業や苦悩を抱えた迷いの凡夫一と記すことは**完全な邪義**である。

\*\*\*\*\*



次に、上、右、大白蓮華63頁の記述も酷い不正、邪義である。一小題を「**日蓮大聖人の仏の御生命**」としながら、文は一凡夫即ち普通の一人一人の生命にも、**釈尊と等しい仏の生命**が厳然と具わっています一と！（私見）なぜ、**日蓮大聖人の仏の御生命**の論述を途中で、わざわざ**一釈尊と等しい一**に変えたのか！**最悪の邪義**である。

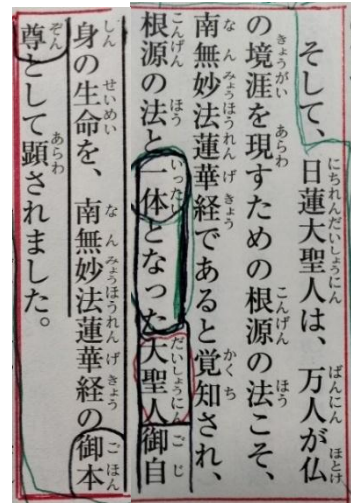
\*\*\*\*\*



また、65, 66頁には一根源の法と一体となった大聖人御自身の生命を、南無妙法蓮華經の御本尊として顕わされました一と。

(私見) 根源の法と一体となったという表現も誤りで、これだと始まりがある仏になってしまう。こんな表現ではまるで根源の法がまずありきで、それに大聖人様の生命が一体化していったかのような錯覚を、任用受験者に抱かせてしまう。南無妙法蓮華經の御本尊は無始無終の久遠元初自受用身如来であられる日蓮大聖人が、魂を染め流し顕わされた自解仏乗の人法一箇の、曼荼羅御本尊である。それを上記

のような根源の法が南無妙法蓮華經、そこに大聖人様が一体になったかのような誤りの表現はしてはならない！これも完全な邪義である。以下、2015年の「教学入門」は、表現は同じく酷いが、結論の「久遠元初の自受用身如来」が記されている。また、釈尊は方便、人法一箇の御本尊と明記である。それを、何故、今月の大白蓮華は理由も示さず記さないのか！悪辣である！



p.176  
 これに対して、法華經本門の文上に説き示される釈尊は、久遠の昔に成仏した永遠の仏としての果報を身に表して、三十二相八十種好など、中には人間離れた特殊な種々の特徴を具えた莊嚴な姿を表現しています。このように超人的な果報を示しているのは、人々に憧憬を抱かせ、慕わせ、教え導くための方便です。この教えは本果妙を表とした教えです。それゆえ、本門文上の釈尊は本果妙の教主といわれます。このような超人的な果報を得るためには、長遠な時間、幾度もの生で、膨大な修行を行う歴劫修行が必要とされます。それゆえ、仏法に対するすぐれた理解・実践の能力が必要です。

p.13  
 Q  
 この発迹顯本以後、大聖人は未法の御本仏としての御振る舞いを示されていきます。そして、万人が根本として尊敬し、帰依していくべき御本尊を顕わされていきました。

p.12  
 この法難は、大聖人御自身にとつて極めて重要な意義をもつ出来事でした。すなわち、大聖人は竜の口の法難を勝ち越えた時に、宿業や苦惱を抱えた凡夫という迹(仮の姿)を開いて、凡夫の身に、生命にそなわる本源的な、慈悲と智慧にあふれる仏(久遠元初の自受用報身如来)という本来の境地(本地)を顕わされたのです。

たく一体である状態を「境智冥合」といいます。

自ら覚った妙法をそのまま説く自受用身の仏は、境智冥合の姿そのものといえます。人と法が一体不二であるので、**人法一箇・人法体一**ともいいます。

ただし、仏であっても、自ら覚った万人成仏の根源の妙法を説かず、聞く衆生に合わせた仮の教えを方便として説けば、境智冥合ではなく、内に覚っている法が勝れ、外に説いている人が劣っているので、人法一箇とはなりません。

日蓮大聖人は、**法華経の寿量品の文の底**に秘められていた久遠の仏の真意である万人成仏の妙法を覚知して、それは南無妙法蓮華経であると説き広めて、久遠元初の自

### 人法一箇

受用身の再誕として振る舞われました。その境智冥合の御自身の生命をそのまま曼荼羅に顕され、私たちが信受すべき御本尊とされたのです。

したがって、御本尊は境智冥合をそのまま表したものです。私たちは、この御本尊を「境」として信受する時、「以信代慧」（信で智慧に代替すること）によって、御本尊に表された御本仏の境智冥合の仏界の生命境涯を、鏡がそのまま引き写すように、自身に生命に顕現することができます。それによって、自身の生命に境智冥合を実現して、凡夫の身のままで成仏し、仏の境涯を享受し、発揮することができるとはなりません。

また、大白蓮華 54 頁からの教学入門、冒頭には一大聖人は仏法を究めるために、16 歳の時、安房国にある清澄寺の道善房を師匠として出家されました。一とだけの記述。それに対し 2015 年発刊の「教学入門」4 頁には、以下記されている。一大聖人は、仏法を究めるために、16 歳の時、清澄寺の道善房を師匠として出家されました。このころ、「明星のごとくなる智慧の宝珠（888 頁）を得られたと述べられています。これは、仏法の根底というべき「妙法」についての智慧と拝されます一と。

（私見）大聖人様の 16 歳での「妙法」の覚知についても、本拙文 4 頁の一「御書の世界」（上）（池田大作全集第 32 巻）

「智慧の宝珠」の体験、御修学、そして立宗

斎藤 誓願を立てた若き大聖人は必死に祈り、研鑽されました。そして、十六歳で正式に出家してから程ないころ、清澄寺の本尊の虚空蔵菩薩像に祈願し、その虚空蔵菩薩から明星のような「智慧の宝珠」を得られたと御書にあります。その智慧によって、当時の八宗・十宗の教義の大綱を把握できたと仰せです。

池田 諸宗、諸経の肝要を知る智慧とは、仏法の根本にかかわる智慧です。

要するに、妙法の智慧を開かれたのです。民衆を根本から救いたいとの大誓願を持ち、必死に求道され、開覚されたのです。

斎藤 仏の悟りを開いたと拝察していいのでしょうか。

池田 わが身の法性を、豁然と開覚されたと拝することができます。

す。凡夫の身に仏性を開かれたのです。一と記しました。

\*\*\*

また、大白蓮華 68 頁には一法華経では、末法の広宣流布が、久遠(計り知れないほどのはるか昔)からの釈尊の弟子である「地涌の菩薩」に託されるのです。(小題)広宣流布こそ大聖人の根本の願い 大聖人はこの地涌の菩薩の使命を果たし、末法の悪世で命に及ぶ幾多の大難を忍ばれて南無妙法蓮華経の大法を弘通されました一と。

（私見）これでは文上解釈なのです！今回の拙文で何か所にもわたり記した通り、本拙文の 9 頁の以下、池田先生の本当のご指導を拝さなければならない一二つ目の邪義は一日蓮大聖人はただ単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩(91 頁)一とあり、「要綱」は、全編を通して何十箇所においても、大聖人を上行菩薩に留め置き、また、末法の期間限定付きの御本仏にすることである。この邪義に対して、池田先生の本当のご指導は以下である。 59/61

—「法華經の智慧」如来神力品には一百六箇抄にはこう仰せだ。（「本門付属の本迹」）「**久遠名字の時・受る所の妙法は本・上行等は迹なり、久遠元初の結要付囑は日蓮今日寿量の付属と同意なり**」むずかしいが、要するに**久遠以来、名字即の凡夫のまま日蓮大聖人が南無妙法蓮華經の本法を所持しておられる。**それが「本」。それから見れば、法華經の經文上の上行菩薩等の儀式は「迹」になる。**經文は、**大聖人が事実として妙法を広宣流布されるための「**予証**（あらかじめ出す証拠）」であり「**文証**」です。「**南無妙法蓮華經如来**」が、**法華經二十八品というスクリーンに「影」を映した結果、久遠実成の釈尊（仏界）や上行菩薩（九界）の姿になったのです。**だから、どこまでも妙法が「本」、上行菩薩は「迹」です。—と。（私見）「要綱」は、この池田先生の本当のご指導を拝さなければならぬ！—と記しました。\*\*\*

また、61頁には一日興上人は、**日蓮大聖人を末法の一切衆生を救う教主(末法の御本仏)と仰ぎ、**大聖人が顕された南無妙法蓮華經の御本尊を根本とし、さらには自ら御本尊を書写し門下たちに授与されました—と。（私見）しかし、私が最も心肝に染める**池田先生**の「百六箇抄」講義には、**日蓮大聖人御自身が日興上人に以下の御文を垂教され、それを池田先生が以下ご教示です。**即ち、日興上人は大聖人様を**久遠元初の自受用身如来**と拝し、決して、末法限定の御本仏とだけの認識はされていなかったのです。ゆえに、上記は邪義なのです

講義の冒頭には一文底深秘の法門を明かした相伝書 **「百六箇抄」は、末法の御本仏・日蓮大聖人より、第二祖・日興上人に口伝された相伝書**であり、正宗においては「本因妙抄」と併せて、両卷抄とも血脈抄とも呼びならわされてきた重書中の重書であります。—と記され、本文には—

（小題）**大聖人こそ久遠元初の仏—「久遠名字より已来た本国本果の主・本地自受用報身の垂謹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要す**」この文は文底の意にのっとり解明であります。「**久遠**」とは**久遠元初**であり、「**名字**」とは**名字凡夫**の位を指します。「**本因本果の主**」とあるのは、本有常住の十界（九界と仏界）の因果を俱時にそなえた仏、という意味であります。故に「**久遠名字より已来た本因本果の主**」の文は、久遠元初において、名字凡夫位のまま、我が身は即妙法の当休であると開悟され、即時に、究極の仏果を得られてより以来、すなわち**無始無終にわたって常住する本国本果の主**である、と拝せるのであります。これ**日蓮大聖人の久遠元初における成道**であり、**久遠元初の自受用報身即日蓮大聖人の**生命が永遠の過去から無限の未来にわたって本因本果の主として常住されていることをあらわした御文であります。—と。60/61

また、(小題) 久遠実成直体の本迹 **久遠元初の自受用身**には—  
わが身即妙法の当体の覚悟が大事

日蓮大聖人は久遠元初において、名字童形のわが身を、即、久遠名字の正法の直体であると覚知され、即座に妙覚果満の仏の大生命を体現されたものであります。総勘文抄には「**釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき**」と記されております。この場合**釈迦如来とは名字凡夫位の釈迦、つまり久遠元初の自受用身如来**であります。「**我が身は地水火風空なり**」とは**わが身即全宇宙であり妙法蓮華經の当体であるとの意味**です。境智の二法からすれば、「我が身」等が境となる。その境を覚知する「知」が智となる。この境地が冥合するところに、**凡夫の当体のまま、即座開悟の無作三身如来の大生命が顕現する**のであります。このような観点から久遠名字の正法と名字凡夫位の釈迦を本迹に立て分ければ、外用の面である凡夫童形の釈迦が迹となり、その内証に脈うつ久遠の妙法蓮華經が本となるのであります。

さて御文には「**名字童形の位、釈迦は迹なり**」にひきつづいて「**我本行菩薩道是なり**」と記されております。この御文は、いうまでもなく南無妙法蓮華經如来の寿量品における「我本行菩薩道」とは、**久遠元初の自受用身即無作三身如来の外用の面の振る舞い**であり、行動であり示同凡夫のお姿であります。故に「迹」となるのであります。凡夫の振る舞いの中に真実の仏法 **末法に出現された久遠の本仏、日蓮大聖人は、妙法を広める立場では上行菩薩の再誕というお姿をとられました。**これ、日蓮大聖人の「我本行菩薩道」であると拝されるのであります。しかし、**大聖人の本地は、あくまで久遠元初の南無**

**妙法蓮華經如来**であられます。一と。

(私見) 上記、**池田先生の本当のご指導**を拝する時、今の大白蓮華がいかにも、不正の教学であるかが明らかなのです。これはまさに、「教学要綱」の底意である釈迦本仏論に追従した邪義であると断言します。これこそ日蓮大聖人への違背、三代会長への不知恩なのです。

私の友人 A 氏は一今年の教学任用試験ですが、4月号の教材を見て魂の抜けた画竜点睛の中身に予想していた通りだと思いました。基礎教学に「**久遠元初自受用身**」「**人法一箇**」の大事の法門が抜け落ちていました。私は毎回、同志や友人を誘って一緒に学習して臨んでいましたが、今回は誘うのを止めました。一と。これが、正視眼の学会員の本音なのです！以上。 61/61